

「人類と感染症の歴史」

令和4年3月14日（月）
城南公民館 第1階会議室
内田 憲 治

1 農耕と牧畜の始まりと感染症

人類はその誕生以来、数々の疾病に侵され苦悩してきたと推測される。長く続いた狩猟や採集生活のなかで、チンパンジーからマラリア、オナガザルから黄熱病、イヌ科哺乳動物から狂犬病といった感染症に罹患したものと考えられている。ただし、その頃の人々は小集団での行動で他集団との交流は少なく感染集団が全滅すれば、それ以上感染が拡大することはなかった。その後、農耕の生活が開始されそれが定着すると、人類は定住生活へと移行し大集落が形成された。そして、人々やさらに人と家畜が接近して生活するようになると、人間と感染症の関係は劇的に変化してゆくようになった。

紀元前 8,000 年頃、西アジアではヒツジ、ヤギ、ブタの飼育などの牧畜が始まると同時期にヒト型コロナウイルスが出現したという説もある。インフルエンザやコロナウイルス感染症などは、野生生物の世界で流行していた感染症が、人類の間でも流行するようになった「人獣共通感染症」なのである。牧畜の開始によって動物との接触が増え、農業の開始によって完全な定住化が進行した。人口の増加によって都市が形成されると人々の密集が頻繁な感染症発生の起因になった。『旧約聖書』や『新約聖書』、古代中国文明やギリシア文明の古典、『ヴェーダ（インドのバラモン教の聖典）』をはじめとする古代インドの文献には、結核、ハンセン病、コレラ、天然痘、マラリア、インフルエンザ、麻疹、ペスト、狂犬病、肺炎、トラホームと考えられる、様々な症状の感染症が登場する。

農業の開始が感染拡大に大きな影響をあたえた感染症にはマラリアや住血吸虫症がある。蚊が媒介するマラリアは、農業の開始とともに人々の間でも流行が始まり、およそ 4,800 年前から 5,500 年前の古代エジプトのミイラからもマラリア原虫の DNA（遺伝子）が見つかっている。住血吸虫は河川や湖沼に生息し、巻き貝を宿主として繁殖しておりメソポタミアやエジプトにおける初期の農耕社会ですでに蔓延している。そして、日本には縄文時代晩期（紀元前 3,400 年以降）頃に水田稲作が渡来し、弥生時代には本格的に水田耕作が盛んになったことから住血吸虫症が発症したと考えられている。川での水浴や水田の灌漑用水などの際に皮膚から侵入し、感染すると発熱し下痢や肝機能障害を引き起こし肝硬変になり、膀胱炎からその後は腎不全を引き起こすという。

2 人類の移動と病気の拡散



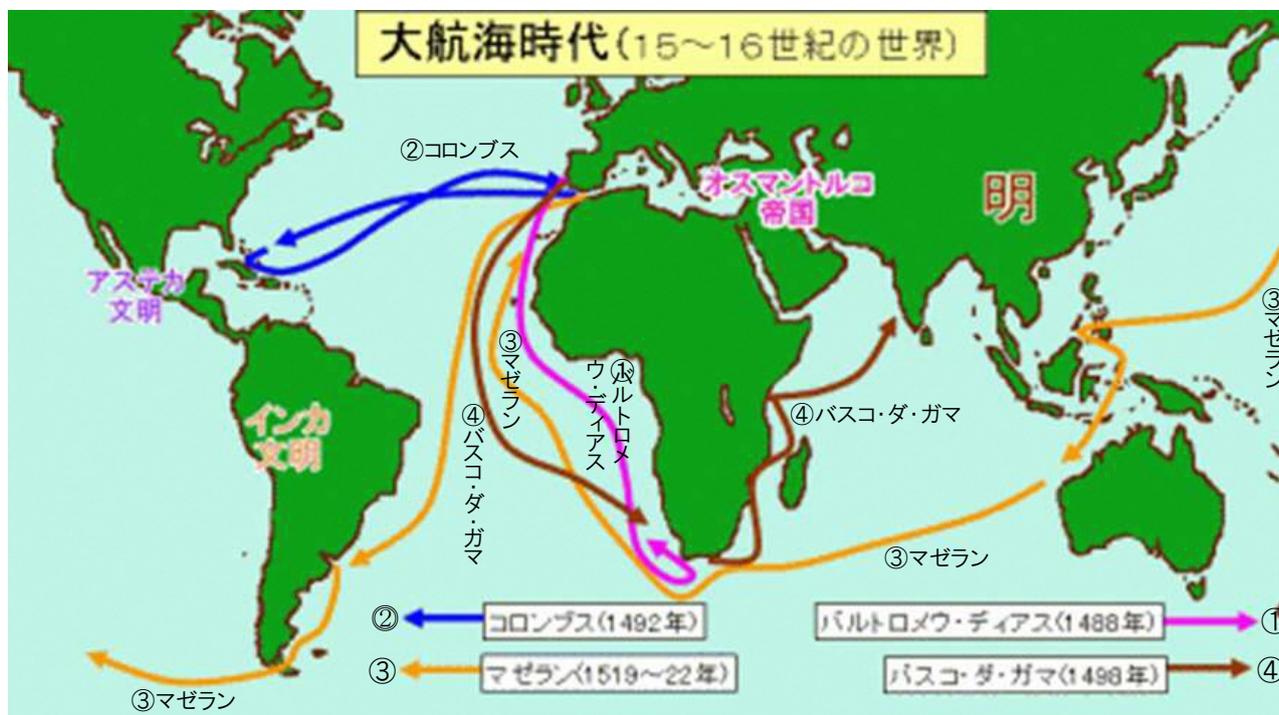
シルクロードは中国特産の絹が縁辺のオアシス都市を經由し西アジアからさらにローマにまで至る道

シルクロードは紀元前 400 年頃から東アジアと地中海世界をつなぎ、絹や漆器、紙などを西方に、宝石やガラス器、金銀細工や絨毯^{じゅうたん}などの文物を東方にもたらしたが、同時にさまざまな感染症を交換させた。天然痘^{ほうそう}（疱瘡）や麻疹^{はしか}は西から東に運ばれ、ペスト（黒死病）は東から西へともたらされた。こうした感染症に対し、人々は免疫をもたなかったので、東西の各地域でパンデミック（世界的大流行）が生じ、多くの人命が失われた。

シルクロードの東西それぞれの起点となった漢帝国と古代ローマは、多くの人口を抱えて繁栄した当時の超大国であった。しかし、2 世紀以降は感染症の大流行が発生し、人口が激減し帝国の分裂と混乱を招いた。なお、11 世紀以降繰り返された十字軍遠征などが、ヨーロッパ大陸にペスト菌による感染症の拡大をもたらしたと考えられている。13 世紀のユーラシア大陸で巨大な領域を有することとなったモンゴル帝国は、シルクロードの大部分を支配下に置くことになり、ユーラシアを横断する交易をいっそう拡大させたが、その代償として感染症も東西に拡散されることになった。

1492 年にイタリアの航海士クリストファ・コロンブスは、スペインのイサヘル女王の援助を得て西インド諸島のキューバ、ハイチなどに到着した。その後も 3 回の航海で南北アメリカ大陸に到達し「大陸の発見」として重視された。それにより大航海時代となり東半球と西半球など大陸間の交流で、植物・動物・食物・奴隷などは甚大で広範囲にわたる交換がなされ、それを表現する言葉として「コロンブスの交換」と称された。その結果、トウモロコシ（中南米）とジャガイモ（南米）は 18 世紀のユーラシア大陸で極めて重要な作物となり、ピーナッツ（中南米）とキャッサバ（中南米）は、東南アジアや西アフリカで

栽培されるようになるなど、世界の生態系、農業、文化の歴史において重大な出来事となった。ただし、ここでは多くの感染症もまた交換されることとなった。すなわち、コレラ、インフルエンザ、マラリア、麻疹、ペスト、猩紅熱、睡眠病（嗜眠性脳炎）、天然痘、結核、腸チフス、黄熱などが、ユーラシアとアフリカからアメリカ大陸へもたらされた。



コロンブスの新大陸発見からスペインとポルトガルを先導として地球全域に及びそれは植民地化に至った

免疫を全く持たなかった先住民はこれらの伝染病によって死亡し人口は激減した。アメリカ大陸には、スペインやポルトガルをはじめとしてヨーロッパ各地から多くの植民者が渡り、スペイン王室は植民者に先住民（インディオ）支配の信託を与えた。征服者や入植者に対し、その功績や身分に応じて一定数の先住民を割り当て、一定期間使役する権利を与えると同時に、彼らを保護してカトリックに改宗させることを義務づけた。まもなく先住民を使役して鉱山で金や銀を採掘し、そしてカリブ海域ではサトウキビの栽培が始まった。どちらも現地の人々のためではなく、ヨーロッパ大陸における需要のための生産であった。先住民は、過酷な労働条件と感染症のために激減し深刻な労働力不足に陥った。これを補うため、ヨーロッパ人は黒人をアフリカ大陸に求めて奴隷貿易が始まった。ここに西ヨーロッパ、西アフリカ、南北アメリカ大陸を結ぶ“人とモノ”の貿易連鎖、いわゆる三角貿易が成立し、大西洋をはさむ4大陸（ヨーロッパ・北アメリカ・南アメリカ・アフリカ）の間に大西洋経済とよばれる世界システムが形成されていった。

一方、アメリカ大陸から旧大陸にもたらされた感染症には、人獣共通感染症であるシャーガス病（サシガメによって媒介され人体に寄生し発症）、性病として知られる梅毒、イチ

ゴ腫（血管異常によりできる瘰^{あざ}）、黄熱病がある。ヨーロッパの疫病が新大陸で猛威をふるった顕著な例として、1545年から1548年にかけてのメキシコでの大流行があり、このときメキシコ中央部では先住民（インディオ）の約8割が死亡したといわれる。

3 人類を脅かした感染症

人類は紀元前の昔から様々な感染症に脅えながら生活してきた。しかし、その時代にはその原因も治療も全く不明であり、従って治療や十分な対応が確立されるには至らず疫病への不安な日々を過ごした時代であった。そのため感染症のパンデミック（世界的大流行）は歴史を変えるほどの影響を及ぼしてきた。

◇ 紀元前からの感染症一覧表

感染症	時代	脅威
天然痘 (人類が根絶した唯一の感染症)	<ul style="list-style-type: none"> ・紀元前：エジプトのミイラに天然痘の痕跡が見られる ・6世紀：日本で天然痘が流行、以後は周期的に流行 ・15世紀：コロンブスの新大陸発見後のアメリカ大陸上陸により天然痘が大流行 ・1980年：WHOが天然痘（痘瘡）の世界根絶宣言 	<ul style="list-style-type: none"> ・50年で人口が8,000万人から1,000万に減少した
ペスト (ネズミの病原菌から伝播する)	<ul style="list-style-type: none"> ・540年頃：ヨーロッパの中心都市（現イスタンブール）に広がる ・14世紀：ヨーロッパで「黒死病」と呼ばれるペストが大流行した 	<ul style="list-style-type: none"> ・最大で1日1万人の死者が出たと言われて ・全ヨーロッパで2,500万人が死亡した
新型インフルエンザ	<ul style="list-style-type: none"> ・1918年：スペイン風邪が大流行（アメリカのカンザス州から発生、第1次大戦で米兵からヨーロッパへ持ち込まれスペインで大流行する） ・1957年：アジア風邪が大流行 ・1968年：香港風邪の流行 ・2009年：新型インフルエンザの大流行 	<ul style="list-style-type: none"> ・世界で4,000万人以上が死亡（日本は45万人死亡） ・世界で200万人以上が死亡 ・世界で100万人以上が死亡 ・世界の214カ国で感染して18,449人の死亡者
新興感染症	<ul style="list-style-type: none"> ・1981年：エイズ（後天性免疫不全症候群） ・1996年：プリオン病（ヤコブ病などの原因となる蛋白質性の因子で変異すると脳内破壊を引き起こす） ・1997年：高病原性鳥インフルエンザ ・2002年：SARS（重症急性呼吸器症候群） 	<ul style="list-style-type: none"> ・20年で2,500万人が死亡 ・イギリスでヤコブ病と狂牛病との関連が指摘される ・高病原性鳥インフルエンザで249人死亡 ・9カ月で罹患者8,093人、そのうち774人が死亡

再興感染症	結核 <ul style="list-style-type: none"> ・紀元前：エジプトのミイラに結核の痕跡が見られる ・1935年～：結核が日本の死亡原因の首位となる ・1950年：結核は抗生物質により発生減少 ・現在：抗生物質に対して抵抗性を示す結核菌が現れる 	<div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;">世界で20億人が感染、毎年400万人が死亡</div> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;">世界で年間3～5億人が感染、100～200万人が死亡</div>
	マラリア <ul style="list-style-type: none"> ・紀元前：「マラリア」についての記録あり ・6世紀：ローマ帝国を中心に大流行 ・1950年代：殺虫剤 DDT などによる根絶計画実施 ・現在：DDT 抵抗性のハマダラカが出現 	

4 古代における日本の疫病史

日本史における最初の疫病は、『日本書紀』の崇神天皇^{すじん}5年の条に登場する。「国内^{えの}に疫病^{やまい}多くして、民死亡れる者有りて、且大半^{かつなかば}ぎなむとす（国内に疫病が流行し、死ぬ者が多く、民の半分ほどだった）」。

この記述の一文は後に、伊勢神宮・出雲大社・石上神宮^{いそのかみ}など主要な3つの神社の起源説の契機とされている。大和王権の実質的初代天皇とされる第10代崇神天皇^{すじん}は、御肇^{はつくにしらすすめらみこと}国天皇^{しき}（初めて国を治めた天皇）と称され、磯城（奈良県桜井市）の瑞籬宮^{みずがきのみや}（神霊の宿る所の宮）に帝都を定めた。次の年、崇神天皇は天神地祇^{てんじんちぎ}（天津神^{あまつかみ}と国津神^{くにつかみ}）に祈ったが疫病は治まらず民の離反は止まらなかった。顧みると、宮中に天神^{あまてらすおおかみ}の天照大神と地方神^{やまとおおくにたまのかみ}の倭大国魂神^{まつ}の2神を並べて祀ったので両神が相反し疫病は治まらなかったと判断された。その後、倭大国魂神^{やまとおおくにたまのかみ}を別に祀らせたところ崇神7年に疫病は収まって五穀も実り国内は安定した。

538年に朝鮮半島の百济国^{くだら}第26代聖明王^{せいめいおう}から日本の第29代欽明天皇^{きんめい}の下に仏像や経典が贈られた。いわゆる「仏教公伝」であるが、外来の神（仏教）の受容を巡っては、崇仏派^{すうぶつは}の蘇我氏^{そが}と排仏派の物部氏^{ものべ}・中臣氏^{なかとみ}の間で激しい争いが起きている中で再び疫病が流行した。その後、蘇我稲目^{そがのいなめ}に礼拝を任せたところ、又も疫病が発生し多数の民が亡くなった。そこで物部尾輿^{ものべのおこし}らは天皇の同意を得て、蘇我氏所有の仏像を難波の堀^すに投げ棄て、伽藍^{がらん}（寺院）に火をつけて焼失させた。両派の対立は次の世代も続き、蘇我馬子^{そがのうまこ}と物部守屋^{ものべのもりや}が争った時にも疫病の惨劇が発生した。かくして第31代用明天皇の崩御の年（587年）、蘇我馬子^{うまやどのみこ}は厩戸皇子^{うまやどのみこ}（聖徳太子）らと共に決起し、物部守屋の一族を滅ぼし、崇仏派は全面的な勝利を得た。当時、疫病が収まらないのは外国の神である仏教を受け入れた「崇^たり」とされ、その疫病は現在の天然痘（疱瘡）であったとされている。古代の天皇は何よりも先ず国家安寧のため神を祀る祭祀者であった。外国の神（仏教）を受け入れるという国家の重

要事の改変に際し、従来の天皇の立場やその在り方に多くの民は混乱したようである。

古代日本において天皇の権力がもっとも高まったのは第40代天武天皇の時代であった。天武天皇は壬申の乱（672年）により、兄・天智天皇の長子・大友皇子から皇位を奪取した。その行軍の途上で伊勢の天照大神を望拝したことが勝利につながったということで、そこで伊勢神宮を設け斎王（未婚の内親王による奉仕）による祭祀制度を確立した。

神亀5年（728）、第45代聖武天皇は夭折した皇太子基王の供養のため金鐘寺を創建した。天平7年（735）、中国で天然痘に感染した遣唐使が帰国し大流行し全国に広がり、国民の1/3である約130万人が死亡した。政界の重鎮である藤原氏4兄弟を始めとする政府高官のほとんどが病死するという惨事に見舞われた。天平年間には自然災害や天然痘が多発し、この災禍を何とか沈静しようとしており、聖武天皇は自分の不徳が要因で疫病が蔓延し治まらないのではと考え苦慮していた。仏教に深く帰依していた聖武天皇は、天平13年（741）に決心し、疫病平易・



聖武天皇

五穀豊穰・国家鎮護のため、各国ごとに国分寺と国分尼寺の造立の詔を出して造立させた。そして、全国の総国分寺とする「金鐘寺」を「金光明寺」と寺号を変えて規模を拡大し創建した。さらに、天平19年（747）頃から「金光明寺」は「東大寺」として寺号の改変が見られ、聖武天皇は毘盧遮那仏像（密教では大日如来）の造立の詔を出している。



東大寺大仏殿

天平勝宝4年（752）、すでに退位した聖武上皇・光明皇太后・孝謙天皇以下を東大寺へ迎え、左手は与願印、右手は施無畏印の毘盧遮那大仏の開眼供養が催された。当時は天災や疫病の流行などは天皇（為政者）



左・与願印、右・施無畏印の毘盧遮那仏

の不徳の結果に起こるものとされていた。聖武天皇が在位してから世の中では度々に疫病や天災が起きており、その責任を痛感していた天皇は仏教に救いを求めた。

聖武天皇は在位中の天平勝宝元年（749）にすでに出家していた。以降、天皇が退位した後に出家した例は12人存在したが、在位中に天皇が出家した事例は聖武天皇のみである。天皇は神の祭祀者としていた時代であり異例のことであった。聖武天皇の妃・光明皇后は大変慈悲深く病に苦しむ民のために「施薬院」という施設を造り、全国から集めた薬で治療を施した。これは日本において病院（療養所）の始まりと伝わっている。

◇ 日本における疫病の年表

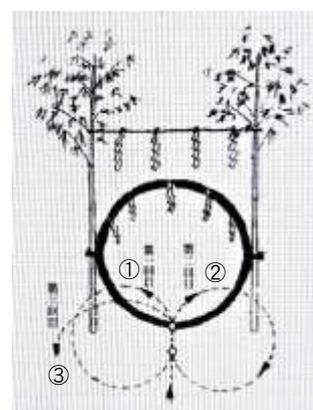
時代	病名	罹病状況
奈良時代	天然痘 735年	・大陸から北九州に侵入し全国し、国民の1/3（約130万人）死亡する。以降は明治時代まで度々流行を繰り返す。
平安時代	赤痢 861年 インフルエンザ 863年 麻疹 998年	麻疹や天然痘は定期的に流行し、麻疹は天然痘よりも感染力が強く致死率も高かった。当時は医療がなく早世する子供が多いため7歳の成長を迎えると祝った。
鎌倉時代	三日病（風疹） 1244年	・天然痘や麻疹も20～50年周期で流行した。
江戸時代	麻疹（はしか） 1708年 コレラ 1822年	・全国的に流行する。5代将軍綱吉が感染し死亡する。後の8代将軍吉宗は感染病対策などを「享保の改革」で行う。 ・西日本で感染が拡大する。1852年には再び長崎へ上陸し江戸へ広がり24万人が死亡する。
明治時代	コレラ 1877年 赤痢 1896年	・日清戦争（1894～1895）の帰還兵が罹患し流行する。後藤新平は臨時陸軍検疫部事務官長に就任し対応する。（医師・愛知県病院長・内務省衛生局長・台湾総督・満鉄総裁・貴族院議員・通信大臣兼鉄道院総裁・内務大臣・外務大臣・東京市長・内務大臣を歴任）
大正時代	スペイン風邪 1918年 （インフルエンザ）	・世界の感染者は6億人、死亡者は2000万人以上とされる

5 日本で行われていた疫病除け

古来、疫病とよばれた伝染病は、目に見えない「疫病神」が病気を引き起こしていると考えられていた。医学が発達していない時代、それに立ち向かうには「疫病除け」を祈願するより他に方法がなかった。疫病神は、鬼や妖怪のような奇怪な姿をしており、人にとりついたり、家に入り込んだりして人々を病気にするものであると想像されていた。疫病に罹らないようにするためには、疫病神を追い払い、近寄らないようにする必要があり、そのために、神仏の力や、疫病神が嫌うことや苦手とするものを使って対応するなど、さまざまな^{まじない}呪いや儀礼が行われてきた。

① 茅の輪（備後国風土記より）

武塔神^{ぶとうのかみ}が旅の途中で見ると裕福な家柄の巨旦将来^{こたんしょうらい}に宿を請うたところ断られてしまった。そこから、しばらく行くと貧しい家柄の巨旦将来^{こたんしょうらい}の兄・蘇民将来^{そみんしょうらい}に宿を請うと、快く承諾してくれた。翌朝、出立の時「茅で作った輪」を蘇民将来に贈り、「これは疫病から守ってくれるので、もし集落に疫病がきたら必ず腰に付



茅の輪くぐりの方法

けよ。そうすれば疫病に罹ることはない」と伝えた。それから間もなく集落に疫病が入り蔓延^{まんえん}したが、蘇民将来の家族は教わったとおり「茅の輪」を腰に付けていたので疫病に罹

ることは無かったが、それ以外の人々は疫病に罹りほとんどの人は亡くなってしまった。

② 祇園社の夏越の祈願

貞観^{じょうがん}11年(869)牛頭天王^{ごずてんのう}は京都祇園社の祭神として勧請^{かんじよう}された。牛頭天王はインドの祇園精舎^{ぎおんしやうじゃ}(釈迦の説法の間)



の守護神である。朝鮮半島を経て我が国へ伝播^{でんぱ}し、祇園祭は怨霊^{おんりよう}を鎮めるために行われてきた祭事である。その後、祇

八坂神社(旧祇園社)の隨身門

園祭は花笠^{だし}や山車を出して市中を練り歩き疫病を鎮めための祭祀になった。鎌倉時代以降は、牛頭天王と蘇民将来の信仰が結びつき、祇園社の縁起に取り込まれて疫病除けの守護祭事として全国へ広まった。しかし、明治新政府は神道国家を目指すため「神仏分離令」が発令し、全国的に神社境内の仏教施設や文物は排除されることになった。そして仏教神を祭神としていた「祇園社」は社号を「八坂神社」に、祭神の「牛頭天王」は日本神話の「須佐之男命^{すさのおのみこと}」に変えさせた。現在も疫病などに罹ることなく無事に夏が越せるよう各地の神社で「茅の輪くぐり」が行われている。なお、牛頭天王が集落の毎戸を巡る「天王まわし」も夏越し^{なごし}の疫病除けの祭事として各所で行われている。

③ 元三大師の札

良源は平安時代中期の比叡山延暦寺の高僧で、正月三日に亡くなったので元三大師^{がんざんだいし}、また角大師^{つのだいし}と称され、贈名は慈恵大師^{おくりな じけい}という。良源は都に疫病が流行ったとき疫病の調伏^{ちやうぶく}(魔性に打勝つ)を祈って座禅をしていた。すると、やがて大師の姿は見るのも恐ろしい鬼のように変化したといわれている。その姿を弟子が写しとり、良源の命によりその姿は版木にして刷った。その札を家々に配り戸口に貼り付けることによって悪疫は治まった。以来、悪疫除けや魔除けの門守^{かどもり}の護符として広く信仰を集めている。



元三大師の札

④ 百万遍念仏

百万遍念仏^{ひやくまんべんねんぶつ}の起源は、鎌倉時代末期の元弘3年(1331)後醍醐天皇の時代、都に疫病が流行ったとき、京都知恩寺^{ちおんじ}にて七日七夜にわたって百万遍の念仏を唱えながら大念珠^{だいねんじゆ}の繰りを行ったら疫病が治まった、ということから時代が下がるにつれ各地に伝わったものである。実際は、百万回唱えるのではなく、数珠^{じゆず}を一回りすると十万回と数えるので、10回大念珠を繰ると百万回唱えたことになる。

⑤ 桜井茶白山古墳(朱の魔除け-1)

朱色は古代より邪悪な悪霊などを寄せ付けない霊力があると考えられていた。例えば、

生命を失った遺体は邪悪な悪霊が憑き、朱色はそれから護る霊力があるとされていた。桜井茶臼山古墳（奈良県桜井市）は、4世紀初頭に築造された前方後円墳で墳丘の全長は207mの大規模な古墳である。大型の竪穴式石室の内面には水銀朱（辰砂）が塗られていた。副葬品は、斜縁二神二獣



桜井茶臼山古墳



朱で塗られた石室

鏡、方格規矩四神鏡、獣帯鏡、平縁の神獣鏡、内行花文鏡、三角縁神獣鏡など81枚以上という国内最多の銅鏡が出土した。さらにヒスイの勾玉、ガラス製の管玉、鉄剣なども副葬されていた。これらの大量な副葬品を伴っていたことから、桜井茶臼山古墳は初期大和政権の大王級の被葬者を埋葬した古墳であると考察されている。

⑥ 神社や寺院など（朱の魔除け-2）

朱色が悪霊から守る例として、他に神社の鳥居・寺院の欄干・地蔵の前掛けなど、歴史や民俗のなかにも事例を見出すことができる。



朱塗りの鳥居

⑦ 朱鍾馗（朱の魔除け-3）

鍾馗は、中国の伝説に登場する人物で、病に臥せっている皇帝の夢にあらわれ、病気を引き起こす鬼を退治したと伝えられている。こうした伝説から子どもの疫病除けなどのご利益を期待して、五月の節供人形になったり、幟旗に描かれたりしている。とくに、魔除けの力がある朱色で描かれたものは、強力な力があるとされている。なお、掛軸に描かれた鍾馗は、疫病除けという縁起物と鑑賞絵画との双方の役割を果たしていた。



朱鍾馗

⑧ 赤い郷土玩具（朱の魔除け-4）

朱色には魔除けの意味があることは、数々の縁起物が赤い色に彩られていることから窺える。会津の「赤べこ」や、高崎の真っ赤な「達磨」は魔除けとして正月に備え、倒れてもすぐに起きあがるダルマは縁起物とされている。埼玉県鴻巣市で作られる「赤物の玩具」も真っ赤に塗られ魔除けや疱瘡除け、疫病除けとして子どもの身近に置かれていた。



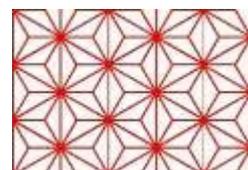
赤べこ



達磨

⑨ 赤衣着物（朱の魔除け-5）

子どもや病人には赤衣着物を着せて、病気の治癒や予防をすることが古くから行われていた。なお、「麻の葉」は、水平・垂直・斜線によって構成された幾何学模様で全く隙間が無く、魔物や悪霊が入り込めず付け



赤い麻の葉模様

込まれないとされ、乳幼児の^{うぶぎ}産着としてよく使われた。また、麻は他の植物に比べ成長が非常に早いことから、それが縁起のよいものとされていた。

⑩ 獅子舞（朱の魔除け-6）

獅子頭をかぶって舞うもので、唐から伝わり舞楽として演奏された。なお、獅子頭には霊力があると考えられ、各地の祭礼などで五穀豊穡の祈禱や悪魔払いとして、正月の祝いに行われるようになった。従来の獅子舞のほか、後に^{しなだま}品玉（複数の玉を投げ巧みに受け止める芸）・皿回しなどの曲芸を大道で演ずる^{だい}太神楽として変容していったものもある。



獅子頭

⑪ 赤い浮世絵（朱の魔除け-7）

^{ほうそうよ}疱瘡除けにご利益のある浮世絵は、赤の濃淡で刷られている。当時、恐ろしかった^よ疱瘡（天然痘）を除けるために、護符のように用いられた。題材には、疱瘡神が嫌うとされる犬、病が軽くすむようにススキで作ったミミズク（目が大きいため失明をしないと言われている）や、鬼退治の桃太郎や剛力であったと言われる金太郎などが描かれている。



金太郎の赤絵

6 病原体の発見

人類は永い間、疫病に脅かされてきたが医学の発展とともに次第にそれらの病原体が明らかになってきた。19世紀の後半になると病原体はすべて細菌であると考えられていたが、その後は微生物学の研究・発展に伴いその分類が進み、^{しんせい}真正細菌（新発見）だけでなく菌類や原生生物にも、宿主に病気を起こす性質（病原性）を持つものが発見された。また病原体には細菌以外にも、様々な微生物、ウイルスが含まれることも明らかになった。

病名	病原体	発見年	病原体発見者
ハンセン病	らい菌（真正細菌）	1875年	アルマウエル・ハンセン（ノルウェー）
マラリア	マラリア原虫（原虫）	1880年	シャルル・ルイ・アルフォンス・ラヴラン（フランス）
腸チフス	サルモネラ属菌（真正細菌）	1880年	カール・エーベルト（ドイツ）
結核	結核菌（真正細菌）	1882年	ロベルト・コッホ（ドイツ）
コレラ	コレラ菌（真正細菌）	1883年	ロベルト・コッホ（ドイツ）
ジフテリア	ジフテリア菌（真正細菌）	1883年	エミール・フォン・ベーリング（ドイツ） 北里柴三郎（日本）明治16年
破傷風	破傷風菌（真正細菌）	1884年	アルトゥール・ニコライエル（ドイツ）
ブルセラ症	ブルセラ属菌（真正細菌）	1887年	デビッド・ブルース（イギリス）
ペスト	ペスト菌（真正細菌）	1894年	アレクサンドル・イエリサン（フランス） 北里柴三郎（日本）明治27年
赤痢	赤痢菌（真正細菌）	1898年	志賀潔（日本）明治31年

梅毒	梅毒トレポネーマ(真正細菌)	1905年	フリッツ・シャウディン(ドイツ)
百日咳	百日咳菌(真正細菌)	1906年	ジュール・ボルデ(フランス)
チフス	サルモネラ菌(真正細菌)	1909年	シャルル・ジュール・アンリ・ニコル(フランス)

7 新型コロナウイルスが発生

令和元年(2019)12月、中国の湖北省武漢で新型コロナウイルスの感染者が最初に確認され、新型コロナウイルスはコウモリの個体群から見つかった。令和2年(2020)7月、WHO(世界保健機関)は国際的な専門家調査チームを結成しウイルスの発生源を調査するため、先遣隊を中国・北京へ派遣した。しかし、中国は調査に同意せず武漢での現地調査は実現するに至らなかった。

* 新型コロナウイルスの発生源

遡ること平成25年(2013)、中国・雲南省の洞窟に生息するコウモリから新たなウイルスが発見されていた。「現在、蔓延している新型ウイルスと同じウイルスではないが、最も近い種類のウイルスと認められており、この状況から論理的には新型コロナウイルスは中国の国内が発生源であることはほぼ確定視される」と、WHOで動物由来の感染症調査を担うピーター・ベンエンバレク博士は語っている。

令和4年(2022)3月2日更新 感染者数および死亡者数

- ・世界の感染者数 … 4億3千6百,981,905人
- ・日本の感染者数 … 5百,005,892人
- ・世界の死亡者数 … 5百,956,509人
- ・日本の死亡者数 … 23,633人

新型コロナウイルスに感染すると一般的な症状は、頭痛、嗅覚や味覚の消失、鼻詰まり、咳、筋肉痛、咽頭痛、発熱、下痢、呼吸困難などがある。軽症の場合は風邪症状で自然治癒するが、重症になると急性呼吸窮迫症候群^{きゅうはく}や敗血症、多臓器不全を伴う。ほとんどの患者(81%)は軽度から中等の症状で、14%は重度、5%は致命的な呼吸不全、多臓器不全となり死に至る状態になる。ワクチンの接種により新型コロナウイルスへの感染ある程度防げるようになった。しかし、このウイルスはアルファ株、デルタ株、オミクロン BA.1 株、オミクロン BA.2 株と変異している。今後は国難ともいえるべき感染症の発生に際し、国政を担う政治家は医療研究機関に予算措置を講じ、強化対策をすることが必要不可欠であり、いざと言う時のために自国でのワクチン開発を可能にするべきである。

引用参考資料

- 『英雄たちの選択・聖武天皇の大国構想』2020 NHK BSP 磯田道史(国際日本文化研究センター準教授)
- 米田雄介『歴代天皇・年号事典』2003(神戸女子大学教授)吉川弘文館
- 『コロナを優に超える死者を出した感染症の歴史』左巻健夫(東京大学講師)
- 『日本史の新常識・日本と疫病の歴史』2020 BS フジ TV 河合 敦(多摩大学客員教授)
- 加藤茂孝『人類と感染病との闘い』2010(元国立感染症研究所室長)丸善出版
- 『歴史鑑定・スペイン風邪』2020 BS TBS TV 監修:川内淳史(東北大学災害科学国際研究所)

◆「よもやま話の会」歴史講座『人類と疫病の歴史』— 付編

「丸」の悪霊および物の怪除けについて

1 「丸」を付すもの

昔の幼名、船舶、城郭、名刀に何故「丸」を付けたのか？文明や化学が発達していない時代は、病気や思わぬ事故などが発生した時、それは「悪霊や物の怪が付いたから」と、考えられていた。

① 幼名（牛若丸、夜叉丸、日吉丸など）

古代などの医療がない時代は成人することなく、幼くして亡くなる子供が大変多かった。病になるのは目には見えない悪霊や物の怪が付いて病になると考えられており、幼名に「丸」を付けることで守り防ぐとした。

② 船舶（咸臨丸、氷川丸など）

古代の船は規模や構造の貧弱さゆえに暴風雨などで転覆・沈没することが多かった。それは船に悪霊や物の怪が付いたためと考えられており、船名に「丸」を付けた。日本船主協会によると平安時代頃（約千年前頃）から船には「丸」を付けていたという。明治時代に作られた法律「船舶法取扱手続第1条」では「船舶ノ名称ニハ成ルベク其ノ末尾ニ丸ノ字ヲ附セシムベシ」というように、船名の末尾には「丸」付けるよう勧告していた。

③ 城郭（本丸、二の丸、三の丸など）

城は敵の攻撃を防ぐために築いた軍事的要塞で中央部に**本丸**、その防御のため**二の丸**、**三の丸**を構築した。悪霊や物の怪が付くと敵に落城されると考えられ、それぞれに「丸」を付けた。

④ 刀（髭切丸＝源満仲、石切丸＝源義平）

名刀といえども悪霊や物の怪が付くと切れなくなるのでそれを防ぐため「丸」を付けた。

2 「丸」を付した理由

古代から医療がない時代には人々は様々な思考により生き抜いてきた。奈良時代には「悪霊や物の怪は臭いものには寄り付かない」と、考えられるようになった。当時、都は人口が多く排泄物の処理に苦慮しており小さな川の上に小屋を建て処理していた。いわゆる川屋（かわや厠）である。従って、水利が豊富な環境でないと遷都はされなかった。古事記に「あさけ朝署に厠に入りし時…」という一文がある。しかし、貴族社会では川屋ではなく次第に室内で用を足すようになり、その時に使われた容器は「オマル＝お丸」と称された。

つまり、その「お丸」には「悪霊や物の怪は臭いので寄り付かない」という考え方である。そのような思考により大切なものを守るため「丸」を付すようになった。

*アフリカには「怪我をした時その部分に動物の糞を塗ると悪霊が憑かずに早く治る」という古い民族例がある。

・講座でお話した「丸」について欠席者のため資料として記しました。（内田憲治）

「復興の人、二宮金次郎」

令和 4年 6月 13日 (月)
城南公民館 第一会議室
内田 憲 治

1 過酷な少年期

天明 7年 (1787)、金次郎は百姓二宮利右衛門の長男として小田原藩領の相模国足柄上郡栢山村（神奈川県小田原市栢山）に生まれる。母は曾我別所村の川久保太兵衛の娘好で、金次郎には友吉と富治郎の弟がいた。父利右衛門は、2町3反（約 2.28ha）もの田畑を有する地域でも有力な農家だった。利右衛門は真面目な働き者で栢山の善人と言われるお人好しで、頼まれると誰にでも金を貸すような人物であった。なお、利右衛門は学問好きで儒学などの本をたくさん持っていた。そんな父の影響を受けて育った金次郎は、父の本を読み学問が好きな子供に育った。父が作ってくれた「砂書き手文具」で、文字を書いては消し、また書いては消しながら文字を覚えていた。



小田原市栢山の生家



生家・台所の囲炉裏



父の手作り砂書き手文具

寛政 3年 (1791) 8月 5日、金次郎が 5歳の時に南関東を襲った暴風雨で付近を流れる酒匂川の堤防が決壊し、金次郎が住む東栢山一带に濁流が押し寄せてきた。その時、二宮家も床上浸水し付近一带には流失した家もあり、土砂や流木が押し寄せ田畑は埋まってしまった。利右衛門は少しずつ田畑の復旧をしていたが、寛政 9年 (1797) に眼病を患い酒匂川堤防工事に出られず代わって金次郎が夫役（人夫役）を務めた。しかし 12歳の年少ゆえに体力がなく働きが足りないと自ら感じ、夜なべして草鞋を作り工事現場で皆に配り働いた。寛政 12年 (1800)、父の病気が悪化し 9月に没



二宮金次郎像

した。14歳の金次郎は家族を護るため懸命に田畑の復旧の傍ら、朝は早起きし久野山に薪をとりに行き小田原城下へ売りに行った。そんな状況のなかでも学問をしたい気持ちに変わりなく、儒学の本を持ち歩き一休みする際に読んでいた。この時の姿が後年に造立された金次郎像である。夜は変わらず草鞋作っては売り一家 4人の生計を立てていた。その 2年後の享和 2年 (1802)、金次郎が 16歳の時に貧困の

中で母が亡くなった。まだ幼い2人の弟は母の実家に預けることになり、金次郎は本家の萬兵衛（父の兄）の家に身を寄せることになり、生家は売り払われてしまった。弟たちと別れる際に金次郎は「必ず二宮家を再興してお前たちを呼び戻す」と伝えた。

金次郎は本家で農作業を懸命に働き、夜は行燈あんどんの明かりで遅くまで本を読みふけていた。それを見て伯父は「百姓に学問など不要、早く寝て明日の仕事に備えよ。何より油が勿体もったいないではないか」と言われた。しかし、金次郎は本が読みたいという気持ちに変わりなくあることを思いついた。知り合いの家を訪ね5勺（約0.09ℓ）ほどの菜種を分けて貰った。その菜種を荒地に蒔くと約100日で7升（約12.6ℓ）ほどの菜種が収穫され、油屋へ行き代金の代わりとして菜種油を頂いた。この油を得たことで夜の読書が続けられることになった。この経験からある時、畦道に捨てられていた稲の苗を荒地に植えてみた。すると秋には1俵分（約60kg）ほどの米が稔り収穫できた。当時、荒地を耕して植えて稔った米は年貢が免除されていたので全て自分のものになった。金次郎は「積小為大せきしょうぎだい（小さなことでもコツコツと積み上げていけば、やがて大きな成果を生む）」を実感していた。18歳になった金次郎は本家を出て1人立することを決意した。

2 活躍する青年金次郎

文化元年（1804）、萬兵衛の家を出て同村の親族で岡部伊助方に寄宿し、この年に荒地の田から得られた米は5俵であった。翌年は親戚で名主の二宮七左衛門方に寄宿した。そのかたわら荒地を開墾し米を作り20俵を得ており、畑で育てた野菜は小田原城下で販売した。文化3年（1806）には20歳で生家の再興に着手し、本家を出てわずか2年で生家の跡地に小さな家しちいれでんちを建て、質入田地の一部を買い戻し、その田畑を小作に出すなどして収入の増加を図った。早く弟を呼び戻したいと思っていたが、3男の富次郎は病により文化4年（1807）に9歳で亡くなってしまった。次男の友吉は母の実家で大事な働き手になっていたので呼び戻すことはできなかった。24歳になった金次郎は1町4反（約1.388ha）の農地を所有するまでになった。文化5年（1808）、母の実家である川久保家ひんきゅうが貧窮するとこれを資金援助し、翌年には衰退していた二宮総本家の伊右衛門家の再興を成し遂げた。この頃の金次郎は、身長6尺（約181.8cm）、体重25貫（約93.75kg）、草履の大きさ9.25寸（約28.028cm）で当時としてはかなり大男であった。

その頃「体が大きく働き者で学問があり、金勘定もできる二宮金次郎という男がいるそうだ」と小田原城下で評判になっていた。その評判を小田原藩家老の服部十郎兵衛が聞き、金次郎を呼び寄せ「服部家の家政の建て直しをして欲しい」と依頼した。この時点で服

部家は200両(約2,000万円)以上の莫大な借財を抱えていた。その要因は、当時の武士は自分の収入に関わらず対面を重んじるような慣習があり、また服部家の用人達は金銭感覚に疎く年々借金は増加していた。金次郎は「人にも家にも分というものがあり、それに相応しい生活を送らねばなりません。これを“分度”といいます。私に一切を任せ分度に従って頂ければ借金は完済できます」と語った。金次郎は服部家とその奉公人たちに「食事は質素、着物は全て木綿、行燈は暮六つ半(午後7時)に消灯、無駄な買物や遊興は禁止」と、かなり厳しい儉約生活を指導した。そして、5年計画の節約で服部家の財政再建を行うことを約束した。文化8年(1811)金次郎は服部家に住み込み奉公賃を頂き、仕事は家政の再建と服部家3人の子供の教育や世話係であった。屋敷にある竹も毎年売り、奉公人には薪の効率良い燃やし方なども指導した。文化11年(1814)に服部家の財務を整理して負債を償却し、余剰金300両を家主に贈り自らはその報酬を一切受け取らなかった。

金次郎の業績は益々広まり文政元年(1818)、小田原藩主の大久保忠真より城へ呼び出された。藩主の忠真は「其方はかねがね農業に精を出し心掛けが良いと聞いた。その方の働きは自分の為はもちろん村の為にもなっている」とのお言葉を頂き表彰された。文政3年(1820)、金次郎33歳の時に服部家に奉公していた16歳のなみと結婚し翌年に弥太郎が誕生した。金次郎は再婚で初婚の妻は「二宮家の家風が自分には合わない」と離別を申し出たので離縁していた。

3 小田原藩主より復興を命じられる

(1) 桜町領の復興

小田原藩主の大久保忠真が民間の建議(意見)を求めた際に、金治郎は年貢米領収樹の改正を建言(政策などに意見を申し立て)し、これが採用されて斗量を改正した。また、小田原藩士のための低利助貸法及び五常講(人の常に守るべき仁・義・礼・智・信の五常による講)を起こした。なお当時、小田原藩は莫大な借財があり家老の服部は金次郎ならば我が藩を立て直せるかも知れぬ、と藩主に進言していた。藩主もその気になったが「百姓に藩の政を任せるなど持つての外」と重臣たちは猛反対であった。そこで忠真は小田原藩大久保家の分家である宇津家の知行所で、下野国芳賀郡桜町が荒廃しているということから、その再興救済を金次郎は藩主から命じられた。桜町領の東沼村・横田村・物井村の3ヵ村は天明3年(1783)浅間山の噴火により、いわゆる“天明の大飢饉”が発生していた。毎年4,000



藩主より桜町領の復興を命じられる

俵の年貢を納めていたが 1,005 俵に激減し、農民は飢えと貧困によりすっかり疲弊しやる気を失っていた。金次郎はこの復興は自分には荷が重いということで固辞した。しかし、藩主の忠真は諦めず再度命じたので、金次郎は条件を提案し「それをお認め頂ければお受けします」と答えた。その条件とは一。

- 一、 向こう 10 年はどんなに豊作でも年貢米の上限を 1,005 俵とし、余剰米分は復興資金として私（金次郎）が管理する。
- 一、 再建費用として小田原藩から米 200 俵と金 50 両で賄い、それ以上は不要とする。
- 一、 10 年間は報告を求めず私（金次郎）を小田原に呼び戻すことはしない。

藩主の大久保忠真は、この条件を受け入れ金次郎に「名主役格」という役職で登用することとした。金次郎は家と土地もすべて売り払い、妻なみと弥太郎を連れて桜井領へ移住する決意をした。

文政 6 年（1823）、金次郎は名主役格・高 5 石二人扶持^{ふち}の待遇、及び移動料米 50 俵と仕度料米 200 俵と金 50 両を給されて桜町に移住した。しかし、復興をするため行動しようとしても地元の役人たちからは冷たい視線で見られ、思うような協力は得られなかった。文政 9 年（1826）には宇津家の家臣が江戸勤めになったので、金次郎が組頭格に昇進し桜町主席になり、ようやく思うような行動がとれるようになった。そこで先ず農民の生活改善と意識改革をすることにした。



二宮金次郎



金次郎が滞在した桜町領の陣屋

生活改善 金次郎は毎日村の中を見て廻り、食べるものが無い者には米や金を与え、家が壊れている者には修理の援助を行った。そして、道の整備や橋の修繕を行った。それは復興するには先ず村内の生活改善からと考えていたからである。

意識改革 金次郎は懸命に働く者を褒め称え様々な褒美^{くわ}を与えた。その褒美とは鋤や鎌などの農具が中心で、現物ではなくそれらの引換券を渡した。時には必要に応じ小屋を建ててあげ、困窮者には 1 年間年貢を免除してあげた。農民たちには自分が頑張れば報われるのだ、という“やる気”を促す策が何よりも肝心であると感じていた。他に用水路を整備し荒地の開墾や借金に苦しむ農民には返済の融資を行い、また村の人口を増やすために他地域からの農民の受け入れをした。しかし、そんな金次郎のやり方に不満を持ち反対する役人たちや農民もいたが、それでも様々な嫌がらせにも屈せず辛抱し行動した。

文政 12 年（1829）正月、桜町領へ赴任して 7 年目に「江戸の小田原藩邸に用がある」

と言って出掛け、1ヵ月過ぎても帰らず金次郎は行方知れず状態になっていた。いわば復興半ばにして、まさかの失踪状態であったが、その金次郎は成田山新勝寺にいた。桜町領の復興成就するための“成功祈願”のために21日間の断食をして不動明王に祈りを捧げ続けた。そして金次郎が悟ったことは「一円観」という



金次郎が祈願した成田山新勝寺のもので、敵対する人も味方する人も桜町領という、一つの円の中にいるのでどちらも“切り捨てることは出来ない”という考えに至った。失踪から3ヵ月を経た4月8日、成田山新勝寺を出ておよそ20里（約78.5km）離れた桜町領まで1日で戻った。帰ってみたら今までのことが嘘のように金次郎への不満の声が消えていた。反対派の役人たちも交替で皆いなくなり、否定的だった村の農民たちも金次郎がいなくなって初めてその偉大さに気付いた。農民たちの意識もすっかり変わり収穫量も増加し、赴任してから9年目の天保2年（1831）には年貢米は1,894俵となり赴任前の倍近くにまで伸びていた。

金次郎の成果に藩主・大久保忠真は大いに喜び、金次郎を呼び寄せてどのように復興したのか問うた。「荒地には荒地の良さがあり、人にもそれぞれ良さや取り柄があります。それを活かして村を復興しました」と答えた。すると藩主は「其方のやり方は論語にある“以德報德”（徳を以って徳に報いる）であるな」と申した。人の場合の徳とは“取り柄”であり、それを尊重し合って活用して行くというのが「報徳」で、以後この「報徳」が金次郎の人生にとって重要な根本思想になっていた。



天保4年（1833）の初夏、金次郎はいつも立ち寄っている農家のナスを食べた時、種ができる部分がいつもより成長が進んでおり、“秋ナスのような味”を感じたことから、これは若しかしたら冷害が来るかも知れないと予感した。そこで桜町領の名主たちに「どの家も畑1反に飢饉に強い稗ひえを植えよ！なお畑1反分の年貢を今年は納めなくて良い。耕せるところはすべて豆やイモを植えて置くべし！」と伝えた。その予測どおり夏には関東や東北地方は雨の日が続き気温は上がらず冷害により大凶作で“天保の大飢饉”になった。各地の被害は甚大で多くの餓死者がでたが桜町領からは餓死者は1人も出なかった。金次郎は



二宮金次郎

蓄えていた食料を近隣各地に送り多くの人々を救済した。それにより金次郎の評判は更に広まり“下野（栃木県）に聖人あり”と称えられた。この評判により隣国の常陸国ひたちのくに（茨城県）青木村から復興を依頼された。金次郎は青木村へ赴き農民に対し「一人ひとりが勤労と儉約によって余財を生み出し、それ

を人々のために使えば必ず復興はできる」と教え諭した。さらに「^{すいじょう}勤勞・儉約・推讓（人を推し自らは譲る）の精神が肝要である」と、いうことを村人に説いて青木村を復興した。天保7年（1836）、金次郎は藩主・忠真に呼ばれ、15年ぶりに故郷へ帰ったら今までの復興の功績を称えられた。



藩主より復興の功績を賞された書

（2）小田原領の復興

小田原領も天保の飢饉によりかなり疲弊していた。そこで藩主より小田原藩の財政再建を命じられた。「飢饉に苦しむ小田原の領民を助け、我が藩を救って欲しい」と託され、特に駿河・相模・伊豆の三州は緊急を要するとのことだった。金次郎は桜町領の復興が成功していた経験を活かし活動を開始した。以前は反発していた重臣たちも桜町領での金次郎の働きぶりや藩内が疲弊していることから渋々承知した。金次郎の進言により藩から領民に金千両が与えられ、また家臣と協議し蔵米を領内309ヵ村に分配・配布したので餓死者を出さずに済んだ。しかし、財政再建を推進しようとした矢先、天保8年（1837）に藩主・忠真が死去した。すると金次郎に好意的だった家老や勘定奉行などが次々と罷免され、小田原藩の中で孤立していった。後ろ盾がいなくなると金次郎の立場は弱くなり「百姓あがりに^{まつりごと}政を任せるのはおかしい」との不満の声は再び大きく立ちはだかった。しかし、それらの声に耳を貸さず金次郎は貧困に苦しむ人たちのために頑張り多くの領民たちを救った。他に個人的に石川氏の下館領、多田彌次右エ門家などの家政も復興している。

4 幕臣になった金次郎

金次郎の評判は江戸にまで届き、天保13年（1842）突然に幕府より文が届いた。それは幕府の筆頭老中・水野越前守忠邦からで「御沙汰ニ付、^{おきたにつぎ}てまわりしだい、^{そうそうしゅつぷいたすべくそうろう}手廻次第、^{しもうきのくに}早々出府可致候」、その内容は「下総国（千葉北部）の村々は水害が多く、多くの人民が難渋しており、其方は用水事業などで実績を上げているので是非相談したい」という。金次郎は、自分は一介の農民であるが幕府の事業を行えば復興の方法を全国に広める機会になる。それにより全国で困っている村々を復興することができる、これまで地方の役人とは事あるごとに対立しながら復興をしてきたが、幕府の役人とは如何なる人たちであろうか、と不安と一方で期待感も湧いてきた。



老中 水野忠邦



二宮尊徳

10月、金次郎は幕府の「御普請役格」に任じられ幕臣として召し抱えられた。この時、金次郎は56歳になり、その翌年に名を「^{たかのり}尊徳」と改めた。しかし、後年には金次郎に対する尊敬の念により「ソントク」と言

われるようになった。幕府から最初に命じられたのは印旛沼に通ずる堀の掘削工事であった。それは利根川から印旛沼、そして印旛沼から江戸湾に通ずる堀を掘削し、銚子から利根川を経て印旛沼を経由し江戸湾までの船を運航できるルートを策定する事業であった。しかし、金次郎が提出した計画書によれば全線の開通工事はおおよそ 20 年余りを要するというので不採用となり実行はされなかった。

次に幕府から命じられたのは弘化元年（1844）、日光神領（^{ふた}二荒山神社・東照宮）の仕法（復興計画書）であった。日光神領は 2 万石という小藩並みの領地を有し、そこには 91 ヲ村があり、その内の 4 分の 1 が荒地となって疲弊していた。この大仕事に尊徳はマニュアル式の復興計画を作成しようと考えていた。その



下野国の日光神領

理由は、これがあればどこの地域にも当てはめられ復興できるという、いわば農村復興の手引書になるものであった。当時の尊徳には大勢の弟子がおり総がかりで領内を見て廻り復興書の作成に取り組んだ。全国どの地にも適応できる復興の雛形として、事業資金の貸付や返済を試算し具体的に数字で表した。2 年以上かけて全 84 巻の『日光御神領仕法雛形』が完成し幕府に提出したが、復興神領の事業はなかなか開始されなかった。それは幕府の役人たちは尊徳が提出した膨大な計画書の処理に戸惑い許可するに至らない状況にあった。その間、尊徳は相馬藩（福島県北東部）、烏山藩（栃木県中東部）、下館藩（茨城県西部）などの財政再建や村の復興を弟子たちと共に手掛けていた。



『日光御神領仕法雛形』全 84 巻
(今市の報徳二宮神社資料室蔵)

幕府から日光神領の復興許可が出たのは『日光御神領仕法雛形』を提出してから 7 年後、嘉永 6 年（1853）のことで尊徳は 67 歳になっており病を患っていた。村々を現地巡回し弟子たちは籠に乗って廻るよう勧めたが、それでは村の様子が良く分からない、と杖を突いて巡回した。その後、病床に臥せるようになったが弟子たちにはしっかりと復興を進めるよう指示していたが、安政 3 年（1856）下野国今市村（栃木県日光市）の報徳役所にて享年 70 で死去した。生涯で 600 以上の村を復興した尊徳であったが、亡くなった時に自分の田畑は一つも無く私有財産はすべて人々のために使ったという。戒名は誠明院巧誉^{せいめいいんこうよ}報徳中正居士^{ほうとくちゆうせい}で、明治 24 年（1891）11 月 16 日に従四位^{じゅうし}が追贈されている。尊徳の死後も『日光御神領仕法雛形』は農村復興の教科書的な存在として全国で参考にされた。

村々の復興に尽くした尊徳の業績を記した伝記『報徳記 全八巻』は、安政 4 年（1857）

四大門人の1人富田高慶^{たかよし}によって著された。それには「我が道は人々の心の荒地を開くことを本意とする。心の荒地が開けたならば土地の荒廃^{なんまんぶ}は何万歩あろうと心配することはないからだ」と、尊徳の晩年の言葉として記されている。伝記『報徳記』を表した富田高慶^{たかよし}は陸奥相馬中村藩（福島県北東部）の藩士で、藩の復興のため尊徳に入門し尊徳の片腕として携わり、後に相馬中村藩の復興に携わった。なお、高慶^{たかよし}は尊徳の娘と結婚している。

二宮尊徳の子孫 尊徳の子・尊行^{たかゆき}（弥太郎）は文政4年（1821）に生まれ、尊徳没後も御普請役の命を受け、遺志を受け継ぎ日光神領89ヵ村の仕法（復興）を推進した。嘉永5年（1852）4月、近江大溝藩士・三宅頼母^{みやけたのも}の娘・餃子^{こうこ}と結婚する。慶応4年（1868）6月、戊辰戦争^{ぼしん}の戦火が今市（栃木県）に及び、母と妻子と陸奥相馬中村藩領内に移った。そこは尊徳の高弟・高田高慶^{たかよし}と結婚している尊行の妹がいるからである。しかし、明治政府の時代になると以降は日光神領の復興は打ち切られた。

尊行^{たかゆき}の長男・尊親^{たかちか}（尊徳の孫）は安政2年（1855）に生まれ、明治4年（1871）父の跡を継ぎ家禄700石を給される。明治10年（1877）、報徳農法を民間で実践する為、富田高慶^{たかよし}（尊徳の高弟）を社長に興復社が設立され尊親^{たかちか}は副社長に就任した。富田高慶が没すると社長に就任し、新天地にて実践することを求めて明治29年（1896）に社員と探検隊を組織し、開墾に適した土地を探して巡り北海道の牛首別原野^{うししゅべつ}に入った。明治30年（1897）、第1期移住民75名とともに北海道豊頃村^{とよころ}（現在の豊頃町茂岩地区）に移住し、二宮農場として豊頃村牛首別原野^{うししゅべつ}を10年で840haを開墾した。その後、宅地や防風林等も含めて興復農場は1,345haにも及ぶ大農場となった。明治40年（1907）に開拓が一段落した為、再び相馬に戻り、妻は報徳婦人会の会長となり、尊親^{たかちか}は中村城三ノ丸跡にある相馬家の執事として事務所に勤め、「報恩全集」の編纂をした。その後、銀行の取締役、大正6年に福島県立薫陶園の園長、大正8年（1919）には報徳学園2代目校長に就任した。

5 明治以降の金次郎の評価

江戸時代から明治となり、農民は田畑を個人所有するようになり、国家へ固定資産税を納め、収穫した米は保有米の他は国家へ供出するようになった。かつて二宮尊徳の復興によって生き返った地域の人々は、時を経て改めて故郷を見るとその偉業を感じていた。復興の恩恵を受けた地域ではその後は尊徳を祭神として神社が創建された。

① **報徳二宮神社** 明治26年（1893）、尊徳の生誕地である小田原に伊豆・三河・遠江・駿河・甲斐・相模の6カ国の総意によ



小田原・報徳二宮神社

り尊徳を祭神とし、小田原城の二ノ丸に「報徳二宮神社」が創建された。

- ② **報徳二宮神社** 明治 31 年（1898）、幕府より日光神領地の復興を命じられ懸命に取り組んだ尊徳を学問・経営の神として終焉の地である今市に「報徳二宮神社」が創建された。



今市・報徳二宮神社

- ③ **桜町二宮神社** 明治 38 年（1905）、小田原藩大久保家の分家・宇津家桜町領の復興を命じられ農民の意欲の向上などを指導し、見事に成功した地である栃木県真岡市もおかに「桜町二宮神社」が創建された。



真岡・桜町二宮神社

*二宮神社の尊徳像には「経済なき道德は戯言ざれごとであり、道德なき経済は犯罪である」という言葉が掲げられている。

明治天皇 明治の世になり尊徳の高弟・富田高慶たかよしが著した伝記『報徳記』を読まれた明治天皇は、「農民にこれほど有能な人物がいたのか」と、驚き『報徳記』を宮内省に印刷させて全国の県知事に配り与えた。それにより、二宮金次郎の名と業績が全国に周知されることになった。



明治天皇

金次郎の銅像が最初に作られたのは、明治 43 年（1910）彫金家の岡崎雪聲せつせいが作った「負薪読書像ふしんどくしょぞう」と言われている。この像は東京彫工会展に出品され、明治天皇はこの像を大変気に入り後にお買い上げになり、明治 45 年（1912）に薨去こうきよされるまで金次郎像をお側近くに置かれていたという。一庶民に過ぎない二宮金次郎の銅像を天皇御自ら手元に置いて大事にされるというのは、当時としては異例中の異例で、明治天皇の二宮金次郎への思い入れがいかに深かったかが窺われる。現在は明治神宮宝物殿に展示されており、この銅像がその後の小学校に置かれた金次郎像の基本的なデザインとされている。



負薪読書像
(岡崎雪聲・作)

二宮金次郎像の造立

二宮金次郎については、少年時代の薪たきぎを背負い読書する姿が有名である。この姿は明治 24 年（1891）刊行の幸田露伴著『二宮尊徳翁』に初めて小林永興えいこうが「負薪読書図ふしんどくしょず」を挿図として描き、その絵が「二宮金次郎像」のモデルとして使われた。そして、明治 37 年（1904）以降、修身の国定教科書に少年期の金次郎が模範的な少年として、数多く登場するようになった。それは、一生懸命勉強し、家の仕事を手伝い、より良い生活をめざす人間としての模範的な姿であったからである。このことにより昭和に入ってから全国の学校

の校庭に少年時代の二宮金次郎像が次々と建てられるようになった。二宮金次郎は「一生懸命努力する」、「働くことを惜しまない」など、日本人が大切にしている姿をたくさん持っていた少年だったので、修身（道徳）の教科書にたくさん取り上げられた。

「金次郎像」で最古のものは大正 13 年（1924）、愛知県前芝村立前芝高等尋常小学校（現豊橋市立前芝小学校）である。造立のもう一つの要因は、日本が 15 年戦争に突入したとされる昭和 6 年（1931）頃からは、まさに国家総動員体制に向かい、皇国意識と国威^{こくゐ}発揚^{はつよう}によるものであった。また、「教育勅語」の徳目^{とくもく}（忠・孝・仁・義）に相まって、金次郎の勤勉・儉約等がクローズアップされ、それを促進するため象徴化され国策に利用される形で銅像建立が全国展開された。その後、太平洋戦争中には石像やコンクリート像は残ったが銅像は武器・弾薬の原材料とするため供出され銅像の金次郎像は姿を消した。昭和 20 年（1945）以前に創建された学校には必ずと言ってよいほど、二宮金次郎像が造立され現在も残っている。



二之宮小学校の金次郎像『子ども新聞 週刊 風っ子』令和 3 年 7 月 4 日 上毛新聞より写真を転載

しかし、時代の推移とともに金次郎像は少なくなっているように見受けられる。それは児童が金次郎像の真似をして本を読みながら道路を歩くと、交通安全上問題があるということで、昭和 45 年（1970）以降より金次郎像は徐々に撤去されているようである。県内で小学校 135 校、中学校 8 校に金次郎像があり、そのうち小学校は 40% 近く残っている（平成 16 年：県立歴史博物館調べ）。

さらに平成 22 年（2010）頃からは“歩きスマホの危険性”が社会問題になり、なお「現在の児童の教育方針に合わない」などの理由も相俟^{あいま}って「二宮金次郎像」は次第に存在感を失い、撤去されその姿を消しているようである。しかし、現代とは全く異なる封建社会において、一農民が地域をこえ公的に奇跡的な復興という大きな業績を成し得た努力の人、ということを生徒に教えるのも歴史教育として大切なことである。

余談：「なぜ二宮姓なのか？」 江戸時代以前に金次郎の一族は足柄郡へ移住し、後に一族の名士が相模国二宮・川匂^{かわわ}神社（中郡二宮町）の宮司になり、それを機に二宮姓を名乗った。ちなみに、相模国一宮は寒川^{さむかわ}神社（高座郡寒川町）、三宮は比比多^{ひびた}神社（伊勢原市三ノ宮町）である。では上野^{こうずけのくに}国の一宮・二宮・三宮は？

引用参考資料

『英雄たちの選択：闘う“復興請負人”二宮金次郎』2021 NHK BSP

大藤 修（東北大学名誉教授） 高橋源一郎（作家） 山口真由（信州大学特任教授・法律家）

磯田道史（国際日本文化研究所センター教授） 藻谷浩介（日本総合研究所主席研究員）

『歴史鑑定：二宮金次郎』2020 BS TBS 飯森富夫（小田原報徳博物館学芸員）

『二宮金次郎』<https:// Wikipedia>

「幕末の英傑、小栗上野介」

令和4年10月5日(水)
城南公民館 第1会議室
内田憲治

1 文武に励んだ少年期

小栗の幼名は剛太郎ごうたろうで文政10年(1827)6月23日、禄高2,500石の大身たいしんの旗本・小栗忠高の長子として江戸駿河台の屋敷に生まれ、成人して忠順ただまさを名乗った。小栗家は当主になると決まって「又一」という通称を名乗った。それは小栗家の先祖たちは数々の戦場に於いて、いつも一番槍(敵陣に一番に突撃し手柄をたてる勇者)で、「又も小栗が一番槍か!」と徳川家康が称賛し「以後は又一を名乗れ!」ということで、小栗家当主は代々通称を「又一」を名乗っていた。幼少時はあまり目立った存在ではなく悪戯好きな悪童と見られていたが、成長するに従って次第に文武に抜きん出た才能を発揮するようになった。14歳の頃には自身の意志を誰にはばかることなく主張するような少年に育った。



小栗上野介

剛太郎は小栗家の屋敷内にあった漢学者・安積良斎あさかごんさいの私塾「見山楼」へ8歳から入門し多くの門人と知り合うことになる。秋月悌次郎ていじろう(朱子学者・明治維新後は教師)、岩崎弥太郎(三菱の創業者)、前島密ひそか(郵便制度の創設者)、榎取素彦かとりもとひこ(群馬県令)、清河八郎(尊攘派志士)、栗本鋤雲じょうん(幕府奥詰医師・函館奉行所組頭・外国奉行・報知新聞編集主任)、権田直助(国学者・神官)、高杉晋作(長州の奇兵隊創設者)、谷干城かんじょう(軍人・政治家)、中村正直まさなお(東京女子師範学校長・東京大学教授)、福地源一郎(小説家・東京日々新聞社長)、箕作麟祥みつくりりんしょう(官僚・法学者)、吉田松陰(明治維新の精神的指導的理論者)など幕末から明治期に活躍した2,282人もの門人が学んでいる。幕末動乱期にこれらの有能な塾生との出会いは剛太郎の人生にとって大きな影響を受けた。



安積良斎

武術は剣術じきんかげりゅうを直心影流おたにのぶともの島田虎之助(男谷信友、大石進と共に幕末の三剣士)に師事し稽古に励んだ。後に藤川整斎せいさい(沼田藩の剣術指南)の門下となり、直心影流免許皆伝を許される。また砲術たつきかづえを田付主計たつけに、柔術と山鹿流兵学(19歳から4年間)を窪田助太郎すかね清音(後の講武所頭取)に師事している。天保11年(1840)頃、田付流砲術たつけの田付主計かづえの同門であった年長者の結城啓之助から「開国論」を聞かされ、以後は大いに影響を受ける。天保14年(1843)、17歳になり江戸城へ初登城する。文武の才を注目され

若くして両御番（書院番と小姓組番）となる。なお、小栗は鉄砲や弓の名手でもあり、砲術及び弓術の上覧（將軍臨席）に於いてそれぞれの的中し、12代將軍徳川家慶から褒美を賜っている。しかし、率直な物言いを疎まれて幾度か役職を変えられたが、そのたびに才腕を惜しまれて役職を戻されている。嘉永2年（1849）22歳の時、林田藩（播磨国揖東郡、現・兵庫県姫路市林田町）の前藩主建部政醇の娘・道子と婚姻した。

2 開国を迫りペリーが来航

嘉永6年（1853）7月8日、アメリカ合衆国東インド艦隊司令長官マシュー・ペリーが、4隻の軍艦を率いて浦賀に来航し大統領の親書を提出した。その後、小栗は来航する異国船に対処する詰警備役となる。しかし、当時の日本は戦国時代からの関船（櫓漕ぎ軍船）しか所持しておらず、日本はアメリカに対し軍事力が劣り対等な交渉ができず、ほぼ受け身的な開国の要求を受け入れることになった。小栗はこの頃から外国との積極的通商を主張し、造船所を作るという発想を持っていた。安政2年（1855）、父の死去により28歳で家督を相続し安政6年（1859）小栗豊後守忠順を名乗る。

嘉永7年（1854）1月16日、予告どおりアメリカの東インド艦隊のペリー司令長官が軍艦7隻を率いて浦賀沖に再来航した。ペリーは将官や船員約500名とともに横浜村に上陸した。その後、幕府側はアメリカとの折衝の代表として幕府の学問所昌平黌を主宰する林大学頭復齋が臨み、アメリカ合衆国の「大統領親書」を受けて日本は開国した。その後、安政3年（1856）8月下田へハリス駐日総領事が着任した。そして、13代將軍・家定との謁見にこぎつけ「日米修好通商条約」の締結することの約束に成功した。ハリスは麻布の善福寺へ公使として滞在し、安政5年（1858）7月29日に米船ポーハタン号上で条約締結の調印が行われた。

しかし、「日米修好通商条約」の締結は日本にとって極めて不平等な条約であった。それは、①「関税自主権の放棄」で日本はアメリカ商品に関税が掛けられない。②「治外法権の容認」は日本国内のアメリカ領域内で日本の法律・特権・支配を受けない。という内容であった。例えば横浜での両替は、アメリカの銀貨4枚と日本の小判3枚で交換されており、日本の



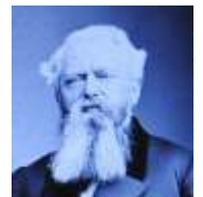
アメリカ東インド艦隊が浦賀へ



ペリー司令長官



林大学守復齋



ハリス領事



銀貨4枚



小判3枚



銀貨12枚

小判3枚をアメリカへ持ち帰ると銀貨12枚になる。つまり、横浜で銀貨と日本小判を両替し帰国してから両替するだけで3倍になる。それによって日本から小判に含有されている金が大量に流失することになり大きな問題になっていた。

3 日米修好通商条約の批准のため渡米する

安政7年(1860)、通商条約の批准のため遣米使節団をアメリカへ派遣することになった。条約は日本にとって極めて不公平な条約内容でありそれを改定することにあつた。

正使は^{しんみまさおき}新見正興、副使は^{むらがきのりまさ}村垣範正、目付は^{おぐりただまさ}小栗忠順(使節一行の監察役)など総勢77人の使節団であつた。小栗の目付は^{なおすけ}井伊直弼大老がその才能を認めて命じたのであつた。



左より 副使・村垣範正、正使・新見正興、監察・小栗忠順

安政7年(1860)1月22日、遣米使節団はポーハタン号に乗船し太平洋を渡り2ヶ月の船旅の後にサンフランシスコに到着する。この時にまだパナマ運河の存在はなく、パナマ鉄道が特別に用意した汽車でカリブ海側へ渡り、船でカリブ海・大西洋からワシントンへ向かった。3月25日に到着し、27



日本の使節団を迎えるブキャナン大統領

日に15代ジェムズ・ブキャナン大統領に^{えっけん}謁見し、4月2日に通商条約の批准書が交換された。ワシントンには25日間滞在するが、その間にスミソ



ニアン博物館、国会議事堂、ワシントン海軍^{こうしょう}工廠、アメリカ海軍天文台を訪れるなど、休む間もない日々を過ごしていた。小栗はワシントン海軍^{こうしょう}工廠を見学した際、日本との製鉄及び金属加工技術などの差に^{きょうがく}驚愕した。それは蒸気機関を用いて同じ規格の工業ネジを瞬時に大量に作っているのを目の当たりにした時であつた。海軍工廠は、軍に属す兵器の大砲・ライフル銃・弾・シャフト・車輪・パイプ・歯車・鍋・釜・キッチン用具などのあらゆる鉄製品を製造する工場である。小栗は日本でもこの海軍工廠このような技術で国を発展させたいという気持ちで、「ネジ」を求め帰国後に多くの者たちに配った。

ワシントン海軍工廠見学時の使節団(小栗は前列右より2人目)



近代化の象徴として持ち帰ったネジ

4月16日、再び大統領に謁見しその後は国務省にて、カス国務長官より使節の^{しんみまさおき}新見正興、^{むらがきのりまさ}村垣範正副使、^{おぐりただまさ}小栗忠順監察の三人には金メダル、以下随員には銀メダル、従者に

は銅メダルが贈られた。なお、ワシントン滞在中に複数回にわたり金銀貨幣の交渉が行われている。代表は新見であったが、目付の小栗が代表者と勘違いされ、行く先々で取材を受けた。勘違いの理由として、正使の新見をはじめ同乗者の殆どが外国人と接したことがなく臆していたが、小栗は以前に^{きつはいびやく}詰警備役で外国人と交渉経験があり落ち着いており、処々で適切な発言をして代表に見えたようである。フィラデルフィア（アメリカ北東部ペンシルヴァニア州）で小栗は通貨の交換比率の見直しの交渉に挑んだ。これは日米修好通商条約で定められた交換比率が不相当で、経済の混乱が生じていたためである。

4 小栗は貨幣両替の不平等交渉に臨む

4月19日にワシントンを出発し、翌20日にはフィラデルフィアの造幣局を見学した。実は小栗は渡米前に軍艦奉行の水野忠徳と通貨の交換比率について綿密に協議していた。なお、金座の勘定吟味役に小判の純度を分析させて状況を把握し、両替商の^{みのむら}三野村利左衛門にも会い両替の不平等解消の準備を整えて渡米した。フィラデルフィア造幣局のスノーデン達の前で、小栗は小判3枚の重量を計り、小判3枚がすべて同量であることを証明した。次に、小栗はスノーデンに“小判を溶かし金の含有量の計測”を要請した。

スノーデン 「5日程のご猶予が必要である」と言われ、小栗らは承知し待機していた。

*結果、日本の小判3枚はそれぞれ金の含有は何れも均一で5.14gが計測された、とアメリカ側から日本側の小栗らに報告された。

スノーデン 「この結果を我が政府に報告し、今後は参考にするよう勧告しよう」

小栗 「それでは不十分である。日・米の金貨はどちらも純金ではない。では、金以外の金属は何かを調べ、その含有量を明らかにせねば、正確な交換比率はなされない。金以外の金属の含有量の計測をお願い申す」と申し入れた。

スノーデン 「それには6日程のご猶予を」と、いうことで6日待つことになった。

*分析の結果、日本の小判は金以外の金属は殆ど銀で他には僅かな銅を含んでいた。その数値を参考に、小栗は会見の場で1両小判の価値を3ドル57ペニと素早く算盤で弾きだした。

小栗 「つまり、小判3両の価値は10ドル71ペニでござる」

*スノーデンらのアメリカ側は、あまりにも素早く計算した小栗に驚愕した。

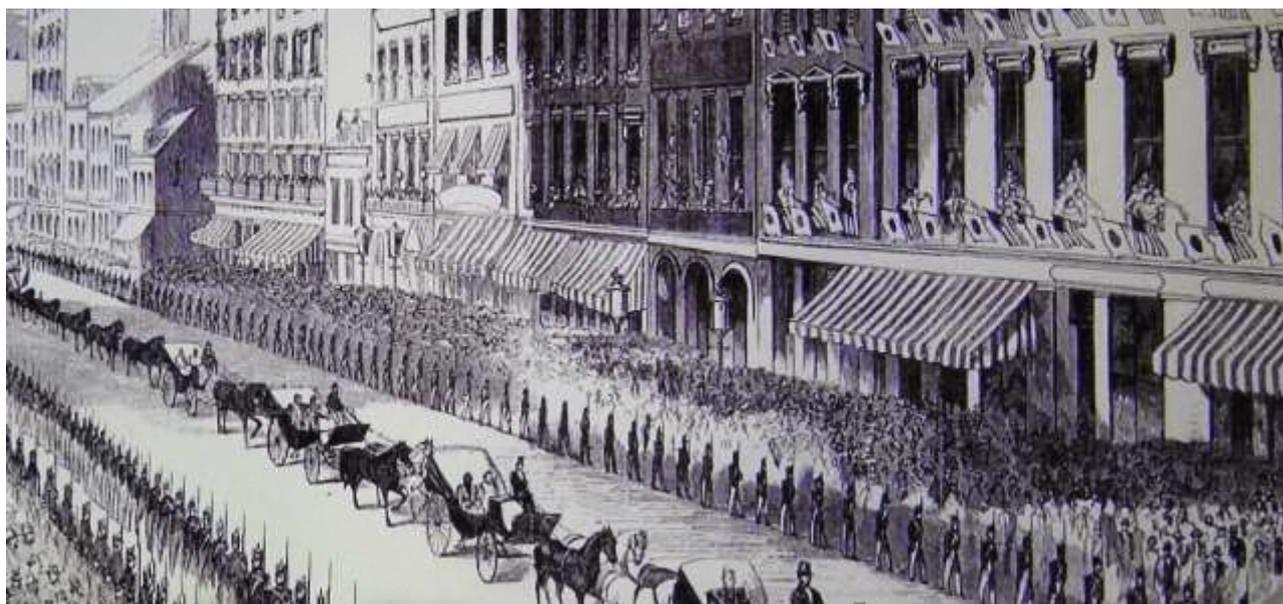
スノーデン 「小栗殿、貴方の言う通りである。ただし、日米修好通商条約はすでに締結済みである。これから交換比率を見直すとなると……」と口ごもると。

小栗 「いえ、この事実を判って頂ければそれで良いのでござる」と答えた。

*小栗は見事にアメリカ側を論破したが、条約変更を求めなかったのは条約の再締結は現

実的に困難であろうと判断していた。実は、小栗は渡米前に小判の金含有量を計測し、両替時のドルに見合うような小判を造るよう準備をして渡米していたのである。そして、会見でスノーデン側に敢えて小判の金含有量を計測させたのは、後に日本の小判の金含有量が減少していてもドルに見合う量にただけのことなので、後々アメリカ側に文句を言わせないための交渉をしたのである。

この日米の貨幣交渉に関して、多くのアメリカの新聞は小栗の見事な“交渉に絶賛”との記事が掲載された。フィラデルフィアには6日間滞在し、4月27日にはニューヨークに到着した。ニューヨークのブロードウェーではパレードが行われ、日本人見たさに市民以外に周辺からも集まり50万人もの人々が集まり、空前と言われる大歓迎を受け警備には8,000人が当たった。日本人は“立ち振舞い”など礼儀正しく、“衣服は整い布地の織も良く”、“持物の細工”も素晴らしい、と強い好奇心でみられていた。当時のニューヨーク・タイムズは「市の歴史で最も目新しく華々しいイベントの一つ」と評している。



ブロードウェーをパレードする日本の遣米使節団を歓迎するニューヨーク市民たち、建物の窓には日章旗が見える

ニューヨークには13日間滞在し、5月12日ナイアガラ号で帰国の途についた。ニューヨークを出発して北大西洋を横断し、7月11日には喜望峰を回ってインド洋に入った。その後、英領香港を經由し9月27日に品川沖に帰着、翌日下船し250日振りに日本の土を踏んだ。出発前に小栗は井伊直弼大老からアメリカ



パレードで馬車に乗る遣米使節

との公正なる貨幣交渉を全うするよう託されていた。しかし、小栗達の出発後41日目の3月3日、桜田門外で水戸と薩摩の浪士に襲われ井伊大老はすでに亡くなっていた。

5 帰国後、内政・外交に携わる

帰国後、遣米使節の功により小栗は200石を加増され2,700石となり、万延元年(1860)11月に目付から外国奉行に就任する。

文久元年(1861)、ロシア軍艦による対馬占領事件が発生した。小栗は事件の処理に当たるが、同時に幕府の対処に限界を感じつつ江戸に戻って老中に三つの提言をした。

- ① 対馬を幕府の直轄領とすること。
- ② 今回の事件の折衝は正式の外交形式で行うこと。
- ③ 国際世論に訴え、場合によっては英国海軍の協力を得ること。

しかし、老中たちは小栗の上記三つの提言を全く受け容れることはなかった。提言した外交的な思案に全く思いを傾けない老中に義憤にかられた小栗は外国奉行を辞任した。

幕末は尊王攘夷論が薩摩や長州を中心として一気に台頭した時代であった。それは外国を排撃し鎖国を主張とする議論である。そんな折の文久2年(1862)9月14日、薩摩藩主の島津久光が薩摩へ帰る途中の行列が相模国生麦なまむぎ(横浜市)にさしかかった際、イギリス人の4人が乗馬のまま行列を遮さえぎる事件が発生した。それに怒った藩士は「無礼者！」と、1人の青年を斬る付け殺害してしまった。いわゆる「生麦事件」で、翌年イギリス軍艦が薩摩を砲撃する「薩英戦争」が勃発した。薩摩藩が起こした「生麦事件」により幕府はイギリスから31万両の賠償を迫られ支払う事になった。

文久3年(1863)5月11日以降、長州藩が外国船に砲撃するという事件も発生している。まず砲撃を受けたのはアメリカの軍艦ではなく商業船で、現在の山口県長門市の沖に停泊していたところ長州藩が真夜中に砲台や藩の軍艦から砲撃した。その後、5月23日にはフランスの軍艦が現在の山口県下関市の沖に停泊していたのを見つけ、この軍艦が関門海峡に来た時に砲台から攻撃している。フランス軍艦はそれに反撃しつつ海峡を通過し、船の損害を受けただけでなく乗員に死亡者も出た。

さらに5月26日、オランダの軍艦が関門海峡を通過しようとした際、その軍艦に対し長州藩は砲台と軍艦から攻撃を加え、オランダ側も砲撃し撃ち合いになった。オランダ軍艦は損害も大きかったが、沈没には至らず海峡から急ぎ離れたが、オランダ側に死亡者が出ている。この長州藩が起こした「下関砲撃事件」でイギリス・フランス・オランダ・アメリカから約225万両の賠償金を請求されいづれも幕府が支払っている。

6 横須賀造船所建設へ

文久2年(1862)、小栗は勘定奉行に就任し名乗りを豊後守から上野介ぶんごのかみ こうずけのすけに変えて、幕府

の財政立て直しを指揮する。そして製鉄所建設について当初は縁のあるアメリカと考えたがアメリカは南部の奴隷制度問題で北部と対立し南北戦争（1860～1865）が勃発し国が疲弊し日本への財政援助する余裕がなかった。小栗は文久3年



中小坂鉄山の製鉄所焙焼炉跡

（1863）、製鉄所建設案を幕府に提出、幕閣などから反発を受けたが、14代将軍徳川家茂いえもちはこれを承認し、11月26日に実地検分が始まり、建設予定地は横須賀に決定した。なお、建設に際し、多くの鉄を必要とすることから、上野国甘楽郡なかおさか中小坂村（甘楽郡下仁田町中小坂）で中小坂鉄山採掘施設なかおさかてつざんの建設を計画し、武田斐三郎あやさぶろうなどを現地の見分に派遣した。見分の結果、鉄鉱石の埋蔵量は莫大ばくだいであり、ついで成分分析の結果、鉄鉱石の鉄分は極めて良好であることが判明した。ただし、近隣での石炭供給が不十分なので、しばらくの間木炭を使った高炉を建設することとした。

元治元年(1864)、勘定奉行の小栗上野介は、幕府の財政が逼迫ひっぱくしていることを承知の上で、あえて製鉄所(造船所)建設を幕閣に提唱した。製鉄所建設は、日本が近代化に向けて必要な工業力の源になると考えたからであった。しかし、幕閣からは「造船所建設は莫大な資金がかかる。造船所建設よりも船は外国から買えばよい」という多くの疑問の声が上がった。これに対し、小栗は「我が国はすでに外国から購入した船を何隻も所有しているが、破損すれば修理する場所が必要であろう。幕府の運命に限りあるとも日本の運命には限りがない。私は幕臣である以上、幕府の為に尽くすべき身分だが、それも結局は日本の為である。幕府のしたことが長く日本の為となり、後々に徳川幕府の仕事のお陰であったと言われれば、徳川家の名誉ではないか。すなわち国の利益ではないか」と論破した。

そして小栗の提案は承認され、フランスから600万ドルの借款しゃっかんを得て、慶応元年(1865)より蒸気機関を動力とする横須賀製鉄所の建設が始まった。小栗の読み通りこの製鉄所から日本の近代化は始まることになる。小栗は今の日本に必要なのは近代化であり、幕府が倒れるか否かが問題なのではない。しかし、一方で自分は幕臣である以上、無節操に幕府を見限ることはできない。幕府が幕を下ろす最後の時まで、最善を尽くすのが真の武士ではないか…。小栗は日本人として日本の将来を見通しての遠望を描いていたのである。



借款書の
小栗署名

フランスへの協力が決定したのは、若き頃に安積良斎あさかごんさいの私塾「見山桜」で共に学んだ栗本鋤雲じょうんであった。栗本は幕府の医師をしており興味を持っていた外国船に立ち入ったことにより函館に左遷された。その函館でフランス公使ロッシュの通訳をしていたカション宣

教師と友人になっていた。その後、栗本は外国奉行になっており旧知の小栗はその伝によりロッシュ公使との接点を持つことができた。小栗は「造船所建設のため幕府に600万ドル用立てて頂きたい」と申し入れた。ロッシュは「それは大金ですなあ」と言う。小栗はすかさず「用立てて頂ければ貴国と生糸の独占契約を結ばせて頂きたい」と言うと、ロッシュは目を輝かせた。日本の生糸はすでにヨーロッパで評判が高くフランスにとって喉から手が出る程に欲しい物であった。



栗本鋤雲

元治元年（1864）、小栗は軍艦奉行になり造船所の建設に着手し、造船技師としてフランスのレオンス・ヴェルニーを任命した。慶応元年（1865）11月15日、横須賀製鉄所（後の横須賀海軍工廠）の建設を開始した。工廠とは軍に直属し兵器・弾薬を製造する工場である。これは幕府公認の事業では初の事例だったが、職務分掌・雇用規則・残業手当・社内教育・洋式簿記・月給制・日曜日の休日など、経営学や人事労務管理の基礎が日本に初導入されることになった。また、製鉄所の建設をきっかけに日本初のフランス語学校である「横浜仏蘭西語伝習所」を設立した。ロッシュ公使の助力もあり、フランス人講師を招いて本格的な授業を行った。この学校の卒業生には明治政府に貢献した人物が多い。小栗は陸軍の力も増強するため、小銃・大砲・弾薬等の兵器・装備品の国産化を推進した。



ロッシュ公使



ヴェルニー造船技師

慶応2年（1866）12月8日、フランス軍事顧問団が到着、翌日から訓練が開始された。また軍事顧問団と時を同じくしてフランスに、大砲90門、シャスポー銃（フランスのシャスポーによって改造された銃）10,000丁、小銃25,000丁、陸軍将兵用の軍服27,000人分などの大量の兵器・装備品を発注、購入金額は総計72万ドルに達した。



横須賀造船所と工廠

経済面では、関税率改訂交渉に尽力し、特にフランスとの経済関係を緊密にし、三都商人（京都・江戸・大坂）と結んで日本全国の商品流通を掌握しようとした。これが後の商社設立に繋がることになる。英語の「company」を「商社」と訳したのは小栗とされている。翌、慶応3



現在も使われている港湾ドック



日本初の株式会社「兵庫商社」

年（1867）、株式会社「兵庫商社」の設立案を提出、大阪の有力商人から 100 万両という資金出資を受け設立した。これは資本の少ない日本商人が海外貿易で不利益を被っていることを受け、解決には大資本の商社が必要との認識によるものであった。100 万両という設立資金は、当時設立されていた株式会社の中でも大きく抜きん出たものであった。8 月 9 日、日本初の本格的ホテルである「築地ホテル館」の建設が始まる。これは小栗の発案・主導のもとに清水喜助（後の清水建設創始者）らが建設したもので、翌年 8 月 10 日に完成する。このように、小栗の財政、経済及び軍事上の施策は大いに見るべきものがあり、その手腕については倒幕派もこれを認めざるを得なかった。



日本初の本格ホテル「築地ホテル」

7 大政奉還と鳥羽・伏見の戦い

慶応 3 年(1867)10 月 14 日、最後の将軍・徳川慶喜^{よしのぶ}は、京都で大政奉還を行い、自ら幕府政治の幕引きをした。これに対し、薩摩藩を中心とする討幕派は、御所を固めて「王政復古の号令」を執行するというクーデターを起こした。さらに新政権には慶喜を参画させず、全ての役職と領地返納を要求した。様々な陰謀の中で新政権を誕生させ、さらに挑発する薩摩・長州に旧幕府側は激怒し、その端緒となったのが慶応 4 年（1868）1 月 3 日の「鳥羽・伏見の戦い」であった。しかし、大坂から伏見を経て京への鳥羽街道と伏見街道の間は極めて狭いので、大軍を繰り出し戦うには地理上不利な状況であった。旧幕府軍の大軍勢が押すと薩長軍は引き、狭い横道の茂みから待ち伏せ軍が一斉射撃する。旧幕府軍は退却せざるを得なくなり、立て直しを図ろうとして淀城へ向かったが、藩主は江戸に居り不在で留守居の家老から入城拒否されて入場できなかった。

薩摩・長州らの新政府軍は大坂城に進軍するなかで奇策に出た。それは「錦の御旗」^{みはた}を先頭に掲げての行軍であった。「錦の御旗」は朝廷の敵、つまり国賊を討伐する時に官軍の標章として天皇から与えられるものである。鎌倉時代頃から用いられ存在したのは 14 世紀の南北朝時代が最後であった。この「錦の御旗」は長州で密かに製作された真っ赤な偽物であった。それは稀代の策士・岩倉具視^{ともみ}のアイデアで作られた旗であった。しかし、将軍・慶喜^{よしのぶ}はこの偽「錦の御旗」によって国賊の汚名を着せられるのを恐れ、腰砕けとなり止める家臣を置き去りにして大坂城から逃げ出した。1 月 7 日、慶喜は榎本武揚^{たけあき}艦長が作戦会議で不在の「開陽丸」に乗り込み、出港を拒否する副館長の澤太郎左衛門に「今、お前を艦長とする」と脅し強引に大坂湾から江戸へ逃げ帰ってしまった。江戸で事の成り

行きを知らされた小栗は、腸^{はらわた}の煮え返る思いであった。現幕府政治ではもはや立ち行かないことは幕臣も承知している。だからこそ上様は大政を奉還申し上げ、近代化にふさわしい政治体制を求めようとされた。それを薩・長の者たちは、上様を締め出し、戦いへと誘い込んだあげく、幕府側を朝敵呼ばわりするに至った。こんな姑息^{こそく}な手を用いる者たちに、日本の近代化など託せようか、小栗はそんな心境であった。



徳川慶喜

慶喜の江戸帰還後、1月12日から江戸城で開かれた評定において、小栗は榎本武揚^{たけあき}海軍副総裁、大鳥圭介、水野忠徳らと徹底抗戦を主張する。薩・長軍は約5,000人、幕府軍はフランス式歩兵部隊で最新の銃を所持する約15,000人であった。小栗は「薩長軍が箱根峠を降りてきたところを陸軍で迎撃し、同時に榎本率いる幕府艦隊を駿河湾から艦砲射撃



小栗の「箱根峠作戦案」筆者：作図

で後続補給部隊を壊滅し、孤立させ補給の途絶えた薩・長軍を殲滅^{せんめつ}する」という挟撃策^{きょうげきさく}（挟み撃ち作戦）を提案した。しかし、將軍慶喜は、勝海舟の江戸城無血開城という「恭順策^{きょうじゆんさく}」を支持し首を縦に振ることはなく、そそくさと評定の場を立ち去ろうとした。小栗は慶喜の着物の裾をつかみ、「上様、お待ち下され。もう一度ご一考を！」と訴えると、「無礼者！」と扇子で小栗の手を払いのけ奥へ消えた。

8 小栗は御役御免となり権田村へ

慶応4年（1868）1月15日、小栗は江戸城へ登城した際、老中松平康英から呼出の切紙を渡された。芙蓉の間にて老中酒井忠惇^{ただとし}、若年寄稲葉重正^{おやくごめん}から御役御免の沙汰を申し渡された。小栗は1月28日、「上野国群馬郡権田村へ土着願書」を提出した。そのことを聞いた旧知の三野村利左衛門^{みのむら}（三井財閥中興の祖）は小栗の身を案じ、千両箱を持参し米国へ亡命するよう勧めたが、これを丁重に断り「これから上野国に引き上げるが、もし婦女子が困窮することがあれば、その時は宜しく頼む」と、三野村に伝えた。また、2月末に渋沢成一郎

（渋沢栄一の弟）から彰義隊の隊長に推されたが、「徳川慶喜に薩・長と戦う意思が無い以上、大義名分の無い戦いはしない」と、これ



小栗は知行地の権田村へ（「群馬県観光案内」上毛新聞より転載）

を拒絶した。2月28日、小栗は一家揃って江戸を去り上野国権田村（高崎市倉渚町権田）の東善寺に移り住んだ。小栗が江戸を去った52日目の4月21日江戸城は明け渡された。権田村は榛名山の西の奥まった静かな山間部の村であるが、良い水路がなく永年の水不足で米の不作が続いていた。小栗は村人の飢饉を救うため、山谷を越えて水路を権田村へ引き込む「小高用水」を完成させた。なお、意志ある村の若者を教育・育成したいと塾を開くため私邸の建設を始め地域に密接し平穏な生活を送り始めていた。



小高用水

慶応4年（1868）4月4日、「反逆の疑いあり！小栗上野介を捕らえよ！」との命を受けた東山道軍の軍監・豊永貫一郎、原保太郎に率いられた高崎藩・安中藩・吉井藩兵により東善寺にいるところを捕縛された。4月6日朝4ツ半（午前11時）、取り調べもされ



私塾を兼ねた小栗邸

ぬまま烏川の水沼河原（高崎市倉渚町水沼 1613-3 番地先）に家臣の荒川祐蔵・大井磯十郎・渡辺太三郎と共に引き出され斬首された。享年42の生涯であった。死の直前、大勢の村人が固唾^{かたず}を飲んで見守る中、東山道軍の軍監に対して、小栗の家臣たちは「無罪である！」であると大声で主張すると、小栗は「お静かに」と言い放ち、「もうこうなった以上は、未練を残すのは止めよう」と諭^{さと}した。そして原が「何か言い残すことはないか」と聞くと小栗は「私自身には何もないが、母と妻と息子の許婚を逃がした。どうかこれら婦女子にはぜひ寛大な恩典を願いたい」と笑顔で頼んだ。実は家族を逃がした後、小栗自身もその跡を追うつもりであった。しかし名主が「殿様を逃がしたとなると村人がどんなひどい仕打ちに遭うか…」との言葉により小栗は村に留まった。処刑の順序は荒川・大井・渡辺・小栗の順だったという。処刑後、小栗らの家財道具一式は没収され、高崎から商人を呼び競売にして売り払い、東山道軍の軍資金として持ち去られている。

小栗は他に比べる者がいないほどの柔軟な吸収力を有し、それを自分の中で解釈して判断する、いわゆる地頭（生まれつきの頭の働き）の良い人だったようである。それ故、薩長にすれば小栗は恐怖の対象であり、偉大な人物だったがためにその存在を消したかった。以降、小栗上野介の業績や人物は埋もれることになった。つまり、歴史は勝者によって書き換えられる、という所以^{ゆえん}である。権田村に隠遁^{いんとん}した小栗は主である將軍に全く戦意がない以上は新政府軍と戦う意味がないと悟っていた。知行地



東善寺の小栗忠順の胸像

の権田村で静かに余生を過ごそうとしていたので、処刑されるような理由などは何ら無かった。それ故、小栗は「罪無くして処刑された」と語り継がれている。

9 残された小栗家の家族

小栗は遣米使節目付として渡米する直前、従妹の鉞子（父・忠高の義弟日下数馬の娘）を養女にし、その許嫁として駒井朝温の次男・忠道を養子に迎えていた。しかし忠道も4月7日に高崎で斬首された。小栗の母・くに子、妻・道子、養女の鉞子は家臣及び村民からなる従者と共に、かねてから面識があった会津藩の横山常守を頼り、会津へ向かって脱出できた。道子は身重の体であり、善光寺参りに身を扮し、急峻な山道である悪路越えの逃避行であった。その後、一行は新潟を経て4月29日には会津に到着し、藩主・松平容保の計らいにより夫人らは会津藩の野戦病院に収容され、6月10日に道子は女兒を出産、国子と命名された。

小栗家の一行は明治2年（1869）春まで会津に留まりその後は東京へと戻った。帰るべき場所がない小栗の家族の世話をしたのは、かつての小栗家の奉公人であり、小栗に恩義を感じている三野村利左衛門（三井財閥中興の祖）であった。三野村は日本橋浜町の別邸に小栗の家族を匿い、明治10年（1877）自分が没するまで終生、小栗の家族の面倒を見続けた。その後、三野村利左衛門の没後も、三野村家は小栗家の面倒を見ていたが、明治18年（1885）に道子が没すると、国子は親族である大隈重信に引き取られた。大隈の勧めにより矢野龍溪の弟・貞雄を婿に迎え小栗家を再興した。

明治45年（1912）7月、東郷平八郎は自宅に小栗貞夫と息子の又一を招いた。東郷は明治37・38年（1904・05）の日露戦争で連合艦隊司令長官に就任し、当時世界最強といわれたロシアのバルチック艦隊を日本海海戦で打ち



東郷平八郎

破り国民的な英雄となった。「日露戦争での日本海の海戦に勝利できたのは小栗氏のお陰である」と礼を述べた後、

「仁義禮智信 壬子 夷則 小栗又一君 東郷書



東郷平八郎書の扁額

花押」と墨書して贈った。この書は、儒教（孔子を祖とする教学）の五常で、「仁」は慈しみや思いやり、「義」は正しい道理にかなうこと、「禮」は人の踏み行うべき道、「智」は物事を知り分ける能力、「信」は言葉に偽りなく発言や約束を守ること、である。それは人が常に守るべき5種の道徳である、と孔子は説いている。つまり、小栗の精神と五常を重ね合わせ東郷はこの書いたものと思われる。「壬子」は干支の壬子年で明治45年（1912）、「夷則」は7月表わす。そして、この月の7月30日に元号が変わり大正元年になる。

10 小栗上野介の幕府役職履歴と評価

弘化4年(1847) 20歳の時に書院番(警備・儀式)。

嘉永6年(1853) 進物番出役(将軍からの^{かししな}下賜品や献上品の取り扱い)。

嘉永7年(1854) 外国船の警戒のため浜御殿(浜離宮庭園の将軍の御殿)の警備担当。

安政4年(1857) 書院番。

安政6年(1859) 目付を任命され日米修好通商条約批准のため渡米を命じられる。

万延元年(1860) 外国奉行。

文久元年(1861) 寄合席(3千石以上の旗本の監督)。

文久2年(1862) 3月、小姓組頭。6月、勘定奉行・勝手方。8月、南町奉行・勘定奉行。

12月、勘定奉行・勝手方・講武所御用(幕府設立の兵術教育機関)。

文久3年(1863) 4月、寄合席。7月陸軍奉行。

元治元年(1864) 8月、勘定奉行・勝手方。12月、軍艦奉行。

元治2年(1865) 2月、寄合席。

慶応元年(1865) 5月、勘定奉行・勝手方。

慶応2年(1866) 8月、海軍奉行・勘定奉行・勝手方。

慶応3年(1867) 12月、海軍奉行・勘定奉行・陸軍奉行などを歴任している。

慶応4年(1868) 1月15日、御役御免となる。

小栗は12代将軍家慶^{いえよし}から、家定^{いえさだ}、家茂^{いえもち}、慶喜^{よしのぶ}の4代の将軍に仕えた。なお、下記の人物らが小栗に対し評価している。

大鳥圭介(幕末の歩兵奉行、維新後は工部大学校長)は、小栗は行動が素早く強い人物で議論を盛んにして武芸に達していた。洋学者によく話を聞き世界情勢を心に留めていた。屋敷へ行くと世界情勢を聞くのでよく話した。記憶力は非常に優れていた。

勝海舟(幕末の軍艦奉行、維新後は参議・海軍卿)は、あの人は精力が人にすぐれて計略に富み、世界情勢にもあらし通じて、しかも誠忠無比の徳川武士先祖の小栗又一によく似ていたよ。あれは三河武士の長所と短所とを両方具えておったのよ。

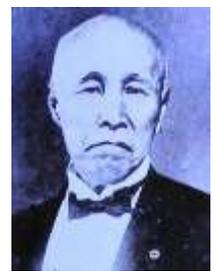
西郷隆盛(薩摩藩の指導者となり幕府を倒す、維新後は陸軍大将・参議、征韓論政変で下野し西南戦争で自刃)は、小栗は偉大なる権謀家(臨機応変の策略家)である。

大村益次郎(長州藩の軍事指導者・戊辰戦争で活躍、維新後はフランス式軍制を進めたが守旧派に暗殺)は、幕府はもし小栗による箱根での挟撃策(挟み撃ち作戦)^{きょうげきさく}を実施していたら我々の首は無かったと、と後年に語っていたという。

三野村利左衛門（三井財閥中興の祖）は、かつて小栗家の仲間を務めていた。後に両替商となり、その才を認められ小栗の^{つて}伝で三井組（後の三井財閥）に入り、後に三井銀行と三井物産を創設した。自分が今日あるのはすべて小栗様のお陰であり、また才知を有した人格者で立派なお方でした。

東郷平八郎（海軍大将、日露戦争で連合司令長官）は、明治45年（1912）7月に小栗家の者を自宅に招いた。そして「日露戦争の日本海海戦に勝利できたのは製鉄所、造船所を建設してくれた小栗氏のお陰である」と礼を述べている。幕府の財政が^{ひっばく}逼迫している折、それを押し切り着々と準備を進め幕閣が猛反対した時、もう後戻り出来ない事態に持ち込んだ。それが無ければ世界最強といわれたロシアのバルチック艦隊に勝利することは出来なかった。これはまさに小栗氏の先見の明が日本を救ったと語る。

大隈重信（東京専門学校を創立、後の早稲田大学・総理大臣）は、明治政府の近代化政策はほとんど小栗の模倣である、と後年に語っている。大正4年（1915）9月、横須賀造船所の創立50周年の祝典が行われた。「この造船所は幕末に小栗上野介の尽力によって、フランスが創設の^{わざ}業を援助することに決しできた」と、大隈は祝辞で述べている。その7年後の大正11年（1922）、横須賀造船所を見守るかのように小栗上野介の胸像の除幕式が行われた。慶応元年（1865）、小栗が横須賀造船所の建設をした際、フランスから購入したスチームハンマーは平成12



大隈重信



造船所を見渡すように小栗像

年(2000)まで135年もの永きにわたり現役で稼働し続けた。スチームハンマーは、製鉄所内で使用する重量3トンのハンマーを蒸気力で持ち上げ真っ赤に焼けた大きな鉄棒を一打ちで切断する工具である。

司馬遼太郎（作家）は、『明治という国家』のなかで、日本近代化に尽くした小栗上野介の業績をたたえ、「明治の父」と語っている。

11 徳川埋蔵金について

慶応4年（1868）4月21日、江戸城が無血開城となり、維新軍が先ず向かったのは幕府の御金蔵であったが中は全く空であった。何度も勘定奉行を経験したのは小栗上野介だったので、その行方について小栗に嫌疑が向けられた。小栗は総てお役を御免となった後、2月28日に江戸を去って上野国権田村に^{いんとん}隠遁し、52日目の4月21日江戸城は明け渡された。しかし、小栗は幕府の財政責任者に数度着任していたことから「小栗が幕府の金を持って逃げた」という流言が飛び、更に「利根川を船で^{さかのぼ}遡って赤城山中へ運び込むのを

見た」と証言する者まで現れた。しかし、幕末の幕府財政は極めて困窮しており、まして赤城山へ運んで埋めるなど、全く可能性は考えられない。その後、現代に至り赤城山に眠るとされている徳川埋蔵金の発掘は何度も行われているが全く発見されていない。

徳川埋蔵金伝説否定説

- 幕末期の幕府は頻発した大地震や飢饉によって財政はかなり疲弊しており、金銭的な余裕はなく赤字続きであったことから、埋蔵するだけの蓄財があったとは考え難い。
- 埋蔵する余裕があれば更に軍備強化し幕府体制の存続を行ったであろう。
- 360万両と風聞される大量の埋蔵金を運搬するのは目立ち過ぎるし、短期間に移動は不可能である。ちなみに360万両の小判は千両箱にすると3,600箱になる。
- 徳川埋蔵金という小栗上野介と語られるが、彼はひっ迫した幕府の財政の中で将来の日本のため造船所や製鉄所建設を主導した男である。その資金はフランスから600万ドルもの多額な借財を受けており幕府には埋蔵する余剰金などは全く考えられない。
- 新政府は旧幕府の金が喉から手が出るほど欲しかった筈である。仮に小栗が御金蔵から金を持ち出したとすれば、東山道軍の軍監・豊永貫一郎らにその情報は達していたと考えられる。権田村で小栗を捕縛^{ほぼく}して、埋蔵金の取り調べもせず2日後に処刑を行ったのは不自然で、埋蔵金を隠していたとすれば江戸送りにして厳重に取り調べをしたであろう。



引用参考資料

- 徳江 健、石原征明『事件と騒動－群馬民衆闘争史－』1980 上毛新聞社出版局
『天才幕臣・小栗上野介』2016 TBS・TV (磯田道史－国際日本文化研究センター准教授)
(林 修－予備校塾講師)
『幕末の真実』2017 TBS・TV (磯田道史－国際日本文化研究センター准教授)
(林 修－予備校塾講師)
『逆説の日本史“日本を変えようとした男”』2017 (井沢元彦－歴史作家)
(村上泰賢－東善寺住職)
『歴史鑑定・徳川埋蔵金と小栗上野介』2018 BS-TBS (山本博文－東京大学史料編纂所教授)
『鳥羽・伏見の戦い』2021 NHK・BSP (保谷 徹－東京大学史料編纂所教授)
(浅川道夫－日本大学教授)、(加来耕三－歴史家)
『英雄たちの選択・小栗上野介の夢と挫折』2018 NHK・BSP
(磯田道史－国際日本文化研究センター准教授)、(前田 仁－歴史作家)
(菅野 稔－津田塾大学教授)、(岩下哲典－東洋大学教授)